

193. 7-0275



1200500728728

193.7
27



始





193.7
0.27

小原福治著

ガラテヤ書講解



966
80

緒言

長野の教會は現在無牧である。主任者がなく、従つて禮拜の講壇は同志の者が交替に擔當してゐる。こんな事情から毎月第一と第三日曜の講壇を私が受持つてゐる。必ずしも難を避け易につくといふばかりではないが、講壇擔當者がレイマンである關係から、講壇を繼續して受持つ場合其の題目をその度毎に見付け出すことは相當に難儀なことである。それ故私は福音書或は書翰等によつて、飛び飛びではあるが順を追つて、主要と考へられる箇所を選んで題目に代へて所信を述べて來た。此の講壇は一昨年の九月第三の日曜日から始めて月に一回づつ漸く此七月終つたのである。講義と云へば講義とも云へる處もあるが必ずしも講義といふことに捉はれることなく、或時は講義であり或時は所感所信でもあつたりした。所感であつたからとて聖書の言を自分勝手に解釋したといふ譯ではない。二三の註釋書特にルーテルの註釋書によつて勉強することによつて相當に準備をしてかゝつたつもりであるが、もと

より不完全なものである。然るに教友の諸君から禮拜の講壇を出版して讀みたいといふ熱心な希望があるので、大方の同信の友にもといふ希望を添へて思ひ切つて活字にして見る氣になつた。これと同じ様なものに、ヨハネ傳があり、マタイ傳があるが、マタイ傳は未完成である。さし向きガラテヤ書が比較的まとまつてゐるので、これに「ガラテヤ書研究」と銘を打つて活字にすることにした。

勿論研究といふべき態は全然備へてゐないが、教友の希望によつて研究と銘を打つておくのである。それ故嚴密な講義や註釋書ではなく、また單に所感ばかりでもない。ただ私自身の信仰告白が中心をなすものである事に間違はない。若し私の此の貧弱な信仰内容の告白によつて幾分でも被造物としての謙遜を學ぶことに助けとなるならばと願ひつゝ、祈を以て此の拙稿を同信の友に頒つのである。

殊に最近社會は基督教に對して尙誤解を持つてゐる節も感ぜられて實に情なく思ふ。未だそんなことにひつかゝつてゐるのかと情なくて致方がない。然しかゝる時に我々基督者も亦自からが日本人として、皇國日本の基督者としての信仰の正體をハツキリと把握する必要を

痛感するのである。吾々の信仰がぐらついてゐるから誤解されるのではないであらうか。この意味に於ても或は多少同信諸君の参考になる節もあらうかと願ふのである。

自からの信仰が明確に把握されてゐる時、吾々は皇國日本に對し、社會に對して毛頭恥づる處もおぢまどふ處もない。何となれば、吾々は主の信任によつて皇國日本の基督者となつたのである。そして眞に皇國に忠であることは福音に最も適はしきことであり、福音に忠なることは自から皇國に忠であるからである。吾々は吾々に與へられた福音に於て皇國日本を愛さなければならぬ。皇國を眞に愛する時吾等は何を恐れ何を恥ぢ何を遠慮せんやである。人々の中にはやゝもすれば基督教を外來の宗教だといひ、又國體と相反するものゝ如く考へてゐるものもある様である。然し基督教を信するものは外來の宗教だなど考へてはゐないし、又考へてゐてはならない。佛教を今日外來の宗教といふものは一人もない様に、靈魂を支配する神の信仰が何條外來の宗教であり得よう。基督教の信仰は人間の業ではないのである。たとへ日本に基督教が傳來したのは外人の仲介によつたのであるとしても、吾等の信仰の立場からは文化の渡來と同様に外人から來た宗教と考へないのである。それは直接に神よ

り與へられたことを確信するものである。又國體と反する等の誤解は宗教の内容本質を識らずして言ふ所の暴言である。佛教を信するものが日本人であると同様に吾等も亦皇國の民である。私は國籍に所屬しない中ぶらりんな人間の存在を知らない。そんな甘いコスモポリタニズムに對しては嘔吐を催す。そんな考をもつてゐる基督者がまさかありはしないであらう。

我ら、萬邦無比の皇室をいたゞく日本臣民として、吾が靈魂の救濟、吾が罪の赦の信仰に關しては見えざる神を信するの幸福を許されて居る。吾等は先づ自からの信仰内容を検討し、是を鮮明にして其の中核をしつかりと把握する必要を此の際特に思ふものである。

ガラテヤ書講解

第一回講壇

パウロが礎を置いた福音の眞理は、パウロのいふ「偽りの兄弟」がガラテヤ教會に潜入したることによつて攪亂され、律法主義の基督教に墮ちようとした。これは常にパウロの建設した礎を崩すばかりでなく、キリストとその十字架の福音を攪亂する結果を生じ、引いては基督教そのもの、存立を危うくする大事件である。神の選民としての誇、それによる民族的傳統とモーセによつて與へられた律法の誇の上に建てられた基督教は、パウロの主張する十字架の福音とは全然對蹠的關係にあるもので、平行して存在することは許されない。神の恩恵を口にしつつ、尙律法の義を固執することは、結局神の恩恵が人間の魂の救には不必要なりとするものである。かくの如き禍根は、その根本より取り除かねばならぬ。ガラテヤ書はこの禍根をその發芽に於て取り除かんがために、パウロによつて書かれた福音擁護の巨砲である。

第一章 一人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦へらせ給ひし父なる神に由りて使徒となれるパウロ、二及び我と偕にある凡ての兄弟、書をガラテヤの諸教會に贈る。三願くは、我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。四主は我らの父なる神の御意に隨ひて、我らを今の惡しき世より救ひ出さんとて、己が身を我らの罪のために與へたまへり。五願くは榮光、世々限りなく神にあらん事を、アアメン。

冒頭の挨拶に於て、パウロは己の使徒たる資格を絶叫しつゝ、パウロを攻撃する者こそ却つて使徒たる資格がないものであることを諷してゐる。「人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦へらせ給ひし父なる神に由りて」使徒職を得た我である、とその舌端は鋭くも初代教會に於ける十二使徒の流を汲む所謂使徒たちにまで向つてゐる様にも思はれる。彼は實にダマスコ途上に於ける彼自身の回心の機を回想して、上よ

り授けられたる使徒としての聖職のために、狂へる如く怒り叫んでゐる様である。

蓋し僞兄弟たちはガラテヤ人を攪亂して、パウロ並にパウロの提唱した福音から離れしむるために、「パウロ何者ぞ、彼は、主イエス・キリストとその御在世中に何の關係があつたか、彼はキリストを知らない者であつたではないか、かの十二使徒の如くには直接の關係をもつてゐない人間ではないか」と罵倒したことは想像に難くない。其邊の消息はコリント後書十一章を参照すれば思半ばに過ぐるであらう。即ち「彼らへブル人なるか、我も然り、彼らイスラエル人なるか、我も然り、我も然り、彼らアブラハムの裔なるか、我も然り、彼らキリストの役者なるか、われ狂へる如く言ふ、我はなほ勝れり。云々(二二—二三)……と。

三節「願くは、我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。」

これ以外の恩恵も平安もあらざれ、である。吾等にも汝等ガラテヤ人にもこれ以外の如何なる幸福も平安も無用である、といふのである。三節のパウロの祝福の言は、吾等が日常かはす様な儀禮一片の書翰の冒頭の語ではない。パウロにとつては、その恩恵と平安の根據た

る信仰の義こそ、問題中の問題であるのだ。

四節は三節の註の様に書き加へられてあるが、然しこの四節にこそ實は全書翰の中心の意味が含まれてゐる。或は又新約聖書の精神を具體的に一言にいひ盡したものともしへよう。主は（我等の父なる神の御意に隨ひて）我等を今の悪しき世より救ひ出さんとて、己が身を我等の罪のために與へたまへり。

即ち、主は自からの自由意志によつて、吾等罪人の側に立ち、我等の罪のためにその身を與へ給うた。これ父なる神の聖意である、といふのである。主は裡に、天父の聖意志を確認せられ、そして迷へる羊の如き人間を憫み給ふ愛によつて十字架の死を遂げ給うた。而して是の如く天父の御聖旨に従ふことも罪人を憐み給ふことも、一に主の自由意志によつたものである。

此の四節の祕義を窺むることなしに、即ちイエス・キリストなしに人は神を知ることも神に到ることも出来ない。この神を顯はすものが主イエスである。主イエス抜きの見神經驗は何人にも不可能である、實に、如何なる人間にもさうなのである。哲人にも、宗教家にも、

聖者にも、羅馬法王にさへもである。神祕主義的に神を見、神を感じたなど、所謂哲人者流がいふ彼の見神經驗といふが如きは、何等の客觀性を有たないものであつて、宗教心理學の對象とはなり得ても、信仰に於ける見神ではない。それは神を語り、神を考へるとは言ひ得るにせよ、要するに人間的に神を引き下げて想像する遊戯である。

聖書の神は人より神を探すのでなく、神が人を求め人に來り給ふ、これがイエス・キリストの父なる神である。アガペーの世界である。恩寵の世界である。愛なる神は神の方から罪人を追求し給ふ。エロス、即ち人間愛の世界では神の事は一切判らないのである。人間の智慧と知識や努力によつて神の性質を思索したり、その本體を捉へんと苦心することは暗中摸索である。斯の如き暗中摸索をやめて、キリストに於て示されし神の性質を探さなければならぬ。「ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言ふか。我の父に居り、父の我に居給ふことを信ぜぬか……」(ヨハネ傳一四・九—一〇)

聖書を見つゝキリスト以外に神を求めんとしても無益の事である。聖書はキリストを指し

示してゐる書である。コロサイ書に「神は凡ての満足れる徳を彼に宿して、その十字架の血によりて平和をなし……」(一・一九)、或は「神の奥義なるキリスト」(二・二)、又「それ神の満足れる徳はことごとく形體をなしてキリストに宿れり」(二・九)とある如く、キリストこそ、その愛こそ、神の聖愛の具體化したものであることを教へてゐる。故に吾等が眞實に魂の救を求むるならば、一切の奇怪なる神探求を捨て、直ちにベツレヘムの馬槽の中のみどり兒に走るべきである。かくすることによつて、何物よりも優れたる愛と愛の力とを認識することが出来る。そこに我等は誠に「聖なる存在」を認め、主は神なり」と告白せざるを得ないであらう。「實にこの人は神の子なり」(Christ is God by nature)とマコ傳一五章三九節にはある。が原語によれば「その本質に於て神の子なり」と改めねばならぬ。

「主は……己が身を

我等の罪のために 與へ給へり」

パウロはいふ、主は金錢・財寶・名譽・地位を我等に與へたのではない。彼自からを與へ給うた。何のために與へ給うたのであるか、我等の罪のためにである。吾等の心情の清きが爲

にでも吾等の善行や努力のためにでもなく、吾等の品性が麗はしいためにでもなく。「吾等の罪のために」であるとハツキリ言つてゐる。この言葉は人間の一切の誇に對する審判の言葉である。これぞヨハネ傳に於ける「見よ、これぞ世の罪を除く神の羔」とともに、聖書中に於て雙璧をなす言である。これは律法の義を詛ふ福音の提唱であり、神の恩恵による神の義を指示する言であると同時に己の義を誇る人間への痛棒である。

ルーテルはいふ「この巨砲をもつて法王權並に一切の宗教的異端、人の業、迷信的傳統、儀式を破壊しなければならぬ。何故に然るか、若し吾等の業や自己満足で罪が除かれるならば、キリストが吾等に遣はされる必要がないからである。主が其他の何人でもなく、唯吾等の罪のために與へられたといふことは、即ち同時に、吾等の罪は吾等自身の如何なる努力によつても取り除かれないといふことを意味するのである。」と。人間の罪はその位根太く且つ大なるものである。パウロは勿論、ルーテルもオーガスチンも其の他の基督者達は皆に思想としてのみでなく罪の根の偉大性を深刻に經驗してゐる。吾等と雖も、十字架の前に自己を判斷する時、同心當時に於けるパウロの經驗に彷彿たるものがないであらうか。何故に人間

はこの罪を輕視するか、それは吾等自身の善なる意志や努力で取り除くことが出来ると思ふからである。

此の四節の言は又眞面目に罪に惱むものに大なる慰を與へる。「吾等の罪のために」である。オーガスチンやルーテルやパウロの罪、ペテロの罪、ヨハネの罪、その他の聖者の罪であつたと同時に吾等の罪のためにであるからである。吾等とはもすれば彼等使徒や聖者たちを特に神の恩恵を受くるに適はしい人間達であると考へ易いと共に吾等自身はどうであらうかと疑ひ易い傾向を有つのである。斷じて然らずである。彼等も吾等と等しく罪人であり罪に惱んだものであり、而して、主はその身を彼等と等しく吾等の罪のために與へ給うた事實に間違のないことを示すからである。

この言によつて、罪は吾等自身の善行で片付けられる様なものでないことを知ることは、非常に大事なことであると同時に、罪の重荷に苦しめらるゝ時決して絶望してはいけないことをも教へるのである。基督者はサタンの誘惑に惱まされ、洪水の様に押し寄せる罪の攻撃の前に孤立無援全く絶望に沈む様な時も、この言を忘れてはならない。主は決して吾等の義

のため、吾等の清きがためにでなく、吾等の不義のため、不潔のため、不信のためにその身を與へ給うたのである。この言葉は吾等の信仰を奪ひ去らんとするサタンの攻撃に對しては特に唯一反撃の武器であることを忘れてはならぬ。サタンは吾等の肉體の弱さにつけ込んで律法と一緒に常て吾等をして神の前に己の行爲にのみ目をとめさせるのである。これは信仰から離れしめんとするサタンのやり口である。

進退谷まり、人力盡くる處、そこに於てこそ誠に主が罪人の友として來り給ひし意味が知らるゝのである。此の時に於て最も鮮明にこの言の意味を知ることが出来るのである。

然し狡猾なるサタンは僞兄弟の唱ふる律法主義の基督教をもちこんで來て、吾等自身の裡にさへイエスを吾等の審判主として示し、終には吾等の信仰まで根本から奪ひ去らんとする。信仰の危機これより大なるはなしである。吾等の罪のためにその身を與へ給ひし主は、決して審判者ではないのである。

「我等を今の惡しき世より救ひ出さんとて」「惡の力の横行する世」である。神を侮辱し、神を犯し、瀆し、その愛の言に耳をかかさざる誇の世である。従つて自己中心の世界であり、

肉の世界である。生れながらの人間に屬する凡ての事は吾等の救には何の力にもならないのである。人間の最も頼みに思ふ己が心も、智慧も知識も、學識も經驗も、良心も乃至富も、美貌も、品性も何もかも悉くサタンの奴隷となるより外なき世の中である。吾等の救はるゝのは唯神の恩恵によつてのみであつて、吾等自身の念願にも意志にもない。今更ながらこの冒頭四節の言の偉大さを思ふのである。

五節「願くは榮光、世々限りなく神にあらん事を」この神以外の何物にも榮光を歸すべからず、である。救に關する限りに於ては人間的事業功績文化にも榮光は歸すべきでない。かくして、神の愛なる御手が罪人なる人間の世に遺憾なく透徹されんことを、と。

第二回講壇

第一章 六我は汝らが斯くも速かにキリストの恩恵をもて召し給ひし者より離れて異

なる福音に移りゆくを怪しむ。七此は福音と言ふべき者にあらず、ただ或る人々が汝らを擾してキリストの福音を變へんとするなり。

(語意) 「速かに」。無節操・無思慮・輕率である。福音の排棄か反逆か、奇怪至極である、無節操である、と。福音のために又彼等ガラテヤ人のためにパウロの忿激實に見るが如くである。常に奇怪のみではなく、恩恵をもて召し給へる者より離れて昔の律法教に歸することは、再び主の十字架を必要とする、それだけ大なる罪を犯すことである。常に己の義を立てんとして努力したパウロ自身の經驗からしては、此の恩恵溢るゝ福音から一たまりもなく復もとるの律法教に歸るとは輕率頑迷實に言語に絶するものがあらう。然し、パウロにとつて最も恕し難く惡むべきはガラテヤ人でなくて偽兄弟である。「異なる福音」とは即ち非福音である、偽物の福音の意である。偽物は偽物としては來ない、必ずや本物の装をして來る。彼等偽兄弟はパウロを責め、パウロは彼等を非難す。何れが眞にして何れが偽なりや。眞物の在る所には必ず偽物が並存する。

パウロは彼等は福音の攪亂者だといふ。問題は獨りガラテヤ教會に關する事ではなく福音の

死活を招く大問題である。眞の福音を述べんとするものは決して攪亂者たり得ない。然るに己の義を立てんとするもの（即ち偽裝者）は必然的に福音の攪亂者であり、同時に、世の攪亂者でもある。「信仰のみでは義とされない」と考へ主張するパリサイの徒こそ詛はるべきかな。うなじの硬き者とは彼等のことである。

福音と律法とは兩立しない。神の憐れと人間の誇とは兩立しない。律法の義を立てんとするものは己に誇るものである。福音に少しでも律法を加味すればそれは福音とは實に水火の如き對立である。福音の律法に對する位置は律法を完了する原動力たるに在る。然し律法は福音と並び行くべきものではない。人間の律法が完全に否定され排棄されて福音があり、而してその事が即ち律法の完うさるゝ事になるのである。福音是ならば律法は否、律法是ならば福音は否である。兩者が同時に人間の魂の支配者たることは出来ない。此の世は律法の支配する所であつて、神の國は福音の支配する所である。

神がキリスト故に吾等の罪を赦し其の義を與へ給ふと主張してゐる聖書の世界にあつて、其の事が信ぜられないといつて、然らば汝己の律法の義によつて救はるゝことが出来ること

を信ぜよと何條宣ぶる事が出来ようか。信仰に律法を掲き交せて基督教だと考へる人々は此の問題を軽く考へるかも知れないが、かゝる態度はキリストを除去する事である。而して信仰の危機實に間髪を容れない。啻にガラテヤ人、羅馬教徒の問題のみではないのである。

八「されど我等にもせよ、天よりの御使にもせよ、我らの曾て宣傳へたる所に背きたる福音を汝らに宣傳ふる者あらば詛はるべし。九われら前に言ひし如く、今また言はん、汝らの受けし所に背きたる福音を宣傳ふる者あらば、詛はるべし。

福音に對する無節操を先づ彈劾し、此處に到つて福音の攪亂者なるあらゆるものを彈劾してゐる。そして信仰のみにより義とさるゝと主張する福音以外に福音なきことを絶叫するのである。何故に福音以外に他の福音はないか。キリスト・イエスの來臨によつて、何人も主イエスを救主とする福音の恩恵を享けるか、或は依然として己の義を立てんとして、律法の詛の前に立つかの岐路に立たせられてゐるからである。

「彼を信する者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の獨子の名を信ぜざりしが故なり。」（ヨハネ傳三・一八）

第三回講壇

第一章 一〇我いま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、抑もまた人を喜ばせんことを求むるか。もし我なほ人を喜ばせをらば、キリストの僕にあらじ。
 一一兄弟よ、われ汝らに示す、わが傳へたる福音は、人に由れるものにあらず。一二我は人より之を受けず、また教へられず、唯イエス・キリストの黙示に由れるなり。一三我がユダヤ教に於ける曩の日の舉動は、なんぢらすでに聞けり、即ち烈しく神の教會を責め、かつ暴したり。一四又わが國人のうち、我と同じ年輩なる多くの者にも勝りてユダヤ教に進み、わが先祖たちの言傳に對して甚だ熱心なりき。一五されど母の胎を出でしより我を選び別ち、その恩恵をもて召し給へる者、一六御子を我が内に顯して其の福音を異邦人に宣傳へしむるを可しとし給へる時、われ直ちに血肉と謀らず、一七我より前に使徒となりし人々に逢はんとてエルサレムにも上らず、アラビヤに出

で往きて遂にまたダマスコに返れり。

一八その後三年を歴てケバを尋ねんとエルサレムに上り、十五日の間かれと偕に留りしが、一九主の兄弟ヤコブのほか執の使徒にも逢はざりき。二〇（茲に書きおくる事は、視よ神の前にて偽らざるなり）二一その後シリヤ、キリキヤの地方に往けり。二二キリストにあるユダヤの諸教會は我が顔を知らざりしかど、二三ただ人々の「われらを前に責めし者、曾て暴したる信仰の道を今は傳ふ」といふを聞き、わが事によりて神を崇めたり。

主題は十一節「わが傳へたる福音は人に由れるものにあらず、我は人より之を受けずまた教へられず、唯イエス・キリストの黙示に由れるなり。」である。實にパウロの使徒となつたのは人からでなく人に由れるでなく直接にイエス・キリストの黙示によつたものである。冒頭に於て述べたことを又此處で繰返してゐる。

一〇我いま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、抑もまた人を喜ばせんことを求むるか、もし我尙人を喜ばせをらばキリストの僕にあらじ。

疑問詞によつて「汝等に福音を傳へんために祖國の人達にも異邦人にも憎まれ迫害されて苦闘を續けて來てゐることを知つたならば我尙人を喜ばせんためでない」ことを知るに難くはない筈である。人を喜ばせんと努むるものは畢竟自己を喜ばす所のものである。

蓋しパウロは律法を非難し神の恩寵のみを説くその事によつて異邦人の歡心を求め神の教を亂すものであるとの非難を受けたであらう、これ想像であるけれどもあり得ることである。神を喜ばせんためにするのであつて義務とするのではない。苟も己の義によつて神に到らんとする考を粉碎するためにはパウロは人間の自由意志・能力・智慧……それらから出た人間製造の宗教これ等の一切を誣ふのである。眞に人を喜ばすのは神を喜ばすことである。然し人は眞に人を喜ばせ得ない。この點に人を喜ばせ得ないことを鮮明に認識す處に福音の默示があるのである。「此の神の默示によつて余は今あるのである」とパウロはいふ様である。

「余は余が宣べ傳ふる福音と異なる一切を誣ひ足下に踏みちつて、何人をも恐るゝものではない。そは人を喜ばせんとするものでないから」と。

「我なほ」回心前のパウロの状態をいふ、律法を完全に守り得ると考へ、それを守ることによつて忠實なる神の僕であると考へてをつたその昔ながらの状態でキリストに對して居たならば、それが如何に此の世の人には立派に見えたにせよ最早キリストの僕ではない。

一「兄弟よ、われ汝らに示す、わが傳へたる福音は、人に由れるものにあらず。二

我は人より之を受けず、また教へられず、唯イエス・キリストの默示に由れるなり。」

セコンドハンドではない。直接にキリスト・イエスの默示によるのである。——人から出たもの、人によれるものは決して神を喜ばせんためではない。人を喜ばせんためであつて畢竟己を喜ばせんためのものである。「バルヨナ・シモン、汝は幸福なり、汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり。」(マタイ傳一六・一七)これが默示である。

律法は人間の理智と共謀して信仰を覆さんとす。神の恩寵・默示によらずしては信仰は有つことも保つことも出来ないものである。實に主イエスを知ることがは人力の外のことであつて、血肉之を示したるにあらず天父よりの默示である。之が復活のイエスであり、今なほ生けるキリストである。この默示を受けんためには人間から人間的なあらゆる誇と光榮を奪ひ

去るを要す。

一三我がユダヤ教に於ける曩の日の舉動は、汝等既に聞けり、即ち烈しく神の教會を責めかつ暴したり。

一四又わが國人のうち、我と同じ年輩なる多くの者にも勝りてユダヤ教に進み、わが先祖たちの言傳に對して甚だ熱心なりき。

主イエス・キリストの福音の前提として極めて必要な言である。(ピリピ書三・六參照) ルーテルの前生世に於ける修道僧としての苦業と相應じて興味ある節である。コリント前書に於てパウロは「最終には月足らぬ者のごとき我にも現はれ給へり。我は神の教會を迫害したれば、使徒と稱へらるゝに足らぬ者にて使徒のうち最小き者なり。然るに我が今の如くなるは、神の恩寵に由るなり。云々」(一五・八一〇)と記して居る。

即ち主の救に預かること(默示による)は人間の價値の如何に存しないといふのである。

一五然れど母の胎を出でしより我を選び別ち、その恩恵をもて召し給へる者、一六御子を我が内に顯して其の福音を異邦人に宣傳へしむるを可しとし給へる時、われ直ちに

血肉と謀らず。

自分が基督の徒を迫害してゐる眞最中に於てかくの如き恩恵を受けたのである。其處に何條人間的意圖と努力あらんやである。

ルーテル自身の述懐に「律法の義に捉はれた自分はその僧院的生活、その敬虔によつて益々神の恩寵に遠ざかり云々。悪魔は實にかくの如き聖者を我子の如く愛す。かくして自分こそ神の恩寵を受くるに適はしいと思ふことによつて神を拒み神に遠ざかつてゐた。」とある。

「母の胎を出でしより」

徹頭徹尾神の聖意志によるといふ意である。一切の光榮を神に、一切の不潔を我に歸して唯主の愛憐のみを意味するのである。

「選び別ち」

パウロの回心は基督の徒に對して恐しき憎惡をもつての迫害の唯中であつた。故に彼の回心は決して彼自身からのものでない。神の選びの中にあつたのである。而して彼の選ばれたのは、彼のパリサイ的熱心のためでなく、彼の律法嚴守のためでもなく、彼の清きがため

もなく、又彼が選民に屬するためでもないと同時に、彼の弱さ、彼の罪、彼の反逆冒瀆も選
びの妨げとなつたのではなく、全く唯神の慈悲と憐みとのみによつたのである。

せねばならぬてふ冷たい義務の觀念からの努力はそれが如何様に大きからうと決して人心
を根柢から改造する力はない。己が一つ一つの業を積むことによつて神にまで近づかんとす
る律法宗教は神に遠ざかるものである。

「御子を我が内にあらはし」

これ默示である。キリストの來臨である。神の恩寵は人間の努力・修養・智慧・苦業によつ
て知ることとは出来ない。默示によつてである。イエス・キリストの吾等の中に現はるゝこと
によつてである。福音は一切の人間的のものに基礎をおいてゐない。否、一切の人間的のも
のを超えて唯上よりの告知である。

「異邦人に宣傳へしむるを………云々」

パウロと雖も異邦傳道など思ひもよらなかつた事であらう。彼は選民の誇をもつた祖國の
同胞と共に、又それだけの政治的メシアの待望者であつた。………異邦人とは即ちイスラエ

ルに對しては外國人で異端者といふ意味を含めてゐるであらう。パウロが異邦人と目して基
督の徒を迫害してゐる最中その異邦人に遣はさるゝなど夢にも考へたことではなかつたであ
らう。これが主の默示である。而して此の異邦傳道こそ實に、イエスの新宗教の死活の問題
を喚起した。而して神はパウロをしてその解決の任に當らしめた。

「血肉と謀らず」

一意専心、人間的利害の念など忘れての意である。血肉（自己に血縁のある者）に謀らず
との意は勿論あるであらう。そのことは、その次の十七節の「我より前に使徒となれる人々
に逢はんとてエルサレムにも上らず云々」との関係で知られる。然し、そんな言の末のこと
よりも、一切の人間的なるものを捨て、一圖に神の恩寵、その默示に満たされたパウロの状
態を思ふべきではないか。

第一章の十節より第二章全部に互つて、パウロは福音の役者としての立場を明かにしつゝ、
そのことそれ自體が福音の眞理なることを主張してゐる。

第四回講壇

第二章

尙パウロは自からの資格について論じ続けつゝ何時しか本書翰の中心問題即ち信仰のみによつて義とさるゝといふ問題に説き及んでゐる。

一節より十四節まで自身の使徒たる資格は神より直接に來れるものであつて、人より與へられたものでないことを主張すると共に、それ故に福音を護るためには何人に對しても一歩も譲歩せぬことを絶叫するのである。十五節以下は福音の中心問題に觸れる。

一その後十四年を経てバルナバと共に、テトスをも連れて、復エルサレムに上れり。

二我が上りしは黙示によりてなり。斯て異邦人の中に宣ぶる福音を彼等に告げ、また名ある者どもにも私かに告げたり、これは我が走ること、又すでに走りしことの空し

からざらん爲なり。

バルナバとテトスとを伴うてエルサレムに上つたのは黙示によつたのであつて、彼等エルサレムの使徒達が招いた故でもなく又彼等によつて使徒たるの資格を公認されんために上つたでもない。福音の正しく成長し正しく宣傳されんが爲で、福音の危機に對し其の防衛上やむを得ずして上つたのであるといふのである。此處に黙示とは神の道に押しやらるゝの心をいふのであつて、一點の私なきやむにやまれぬ心の状態をいふのである。

三而して我と偕なるギリシア人テトスすら割禮を強ひられざりき。四これひそかに入りたる僞兄弟あるに因りてなり。彼等の忍び入りたるは、我らがキリスト・イエスに在りて有てる自由を窺ひ、且われらを奴隸とせん爲なり。

「ギリシア人テトスすら割禮を強ひられざりき」とある。テトスが割禮を受けたのか、受けなかつたのか其の邊は明瞭に表はれてゐない。然し強ひられなかつたことは明かである。「僞兄弟」はスパイの如きものが居なかつたらパウロもテトスの割禮に對して、さう八ヶ間敷諍はなかつたであらう。キリスト・イエスに在る自由、即ち恩恵によりて律法の責から

解放された自由を奪つて、再び律法の奴隷とせんとするスパイである。これこそ實に福音の害敵である。

五然れど「福音の眞理の汝等の中に留らんために、我等一時も彼等に譲り従はざりき。」

律法の遵法では決して義とされず、唯キリスト・イエスを信する信仰のみによつて義とさるゝことをパウロはキリストの愛に於て洞察して誤まらなかつた。蓋し律法の聖者ともいふべき彼は怖るべき罪人としてダマスコ途上に於て打ちのめされた彼である。修養・道徳・律法の嚴守等をやゝましくいふ人の姿が極めて偽善であり、かつ冷酷であり、そしてその外形的の倫理的行動が、自己防衛以外の何物でもなき悲惨な姿は彼自身過去の姿を通して如何に人生の醜惡なる姿である、をパウロは見たであらう。羅馬教徒は信仰は義とさるゝ基礎ではあるが、その信仰は施與（ホドコシ）によつて装はれざるべからずと説く。結局ユダヤ的基督教と毫も違はない。然るに、信仰とは吾等の罪のために己が身を與へ給ひし十字架の主を仰ぎ見るより外のことではないのである。信仰は、余は何を爲せしか、何を爲し得るか、何を爲すべきかを見ず、又余は如何なる罪を犯したか、余は何に値するか、余はどれだけの

價值があるかを問はない。キリストは何を爲し給ひしか、キリストが何に値するかを見るのである。かくの如き恩惠の眞理を亂して再び律法の下に奴隷たらしめんとする猶太的人間教にはパウロは一步も譲らないのである。

「忍び入り」の言葉も面白い。幻だとか不確實だとか世人の考へ易い福音。悲・怖れ・苦・惱のある人達の中へ、主イエスのみ唯一のたよりだといふ眞理にかへて、如何に最もらしい異なる福音即ち人間教を持ち込んで來て知らぬまにキリストを抛棄さしてしまふのである。

律法、道徳律は清き生活を示すのみであつて、吾等を罪からは解放してはくれない。故に律法に囚はるゝ事は、つまり自分は何でも爲し得るといふ妄信を持つ事であつて、神よりも己である。律法は偽兄弟と共に巧妙に福音の中に忍び入るのである。故に吾等はいつても福音を相談相手にしなければならぬ。福音は不變の態度でいふ、「汝等何をなすべきか」でなく「主は何をなし給ひしか」と。

テトスの割禮問題も彼等が兄弟に對する好意といふ様な軽い意味で申出されたならばパウロも決して抗議はしないであらう。然るに割禮が義とさるゝに必要な條件として強ひられ

る時、これこそ福音の死活に關するからである。而して、テトスの場合は管にテトスだけの事に止まらず、將來にイエス・キリストに來るべきものに對し、惡例となるからである。

『六然るに、かの名ある者どもより——彼等は如何なる人なるにもせよ、我には關係なし、神は人の外面を取り給はず——實にかの名ある者どもは我に何を加へず、七反つてペテロが割禮ある者に對する福音を委ねられたる如く、我が割禮なき者に對する福音を委ねられたるを認め、

△彼の名あるものども……………

△神は人の外面を取り給はず……………

人間は兎角その外面に眼を奪はるゝものである。今の社會を見よ。信仰によらざる所殆んど外面が問題である。爲政者・牧師・官吏・先生・生徒・父・母・子これらは地上に神のよしとして認め給うた人間としての職務であり、資格である。そして相互にその人格を尊重し、その職分を尊重して誠實をもつて互に仕へるべきを望み給ふのである。然しそれ等の關係に於ても一度魂の底を顧みる時そこに何等の純美な關係をも期待することは出來ないのである。

人間が神よりも人物、神の言よりも人の教、神の憐よりも人の同情、神の愛よりも人間の愛、神の能力よりも人間の努力、自己の努力に目をつけるそのことが罪である。罪これより大なるはないのである。神は人間がペテロやパウロ達或は法王といふ様な偶像を神以上に崇拜することを好み給はない。彼等使徒たちは或は生前に於て主の兄弟として主に仕へ或は主の福音のために働きかつ苦しんだ。然しそれが義とされたのではないのである。そして彼等が如何なる人物にせよ吾等に何を加へることも出來ないし、實は其の彼等すら余を異邦傳道の正しき使徒として承認したのである。

十一節以下ペテロを叱責しつゝいつしか本書翰の中心問題に觸れてゐる。

ペテロがアンテオケに於て、異邦人と共に食してゐた其處へ、ヤコブのもとよりエルサレム系統の人が入り來つたので、それ等のの人々の非難を恐れて再び異邦の人達と食事することをやめて其の座を外した。これはユダヤ人の律法による異邦人と食を共にしないといふ陋習のためである。かくの如き首鼠兩端の行動は實に卑劣であるばかりでなく、その結果は由々敷大事を引き起す。即ち福音の破棄である。ペテロの行動はその弱さから來た同情すべき行

動であるにしても、實は福音放棄の行動である。これはパウロにとつては一步も假借することが出来ないことである。眞理に従ひて正しく歩まざる結果は遂に大事を惹起するので、パウロはペテロに對する同情も好意も顧みる暇はなかつたのである。

然しこのことは言葉の上では明瞭であるけれども、一朝かくの如き試惑に際して正しく行動することはさう容易なことではない。平常口に福音の純粹性を云々するけれども、かかる場合に直面する時、其の福音を赤の他人の様に冷かによそよそしく遇するのが人情の弱點である。恰かも極くまれにしか訪れないまらうどの様にしかあしらはない。主の捕はれの夜のペテロの反逆がそれである。かくの如くして律法主義は吾等基督者の裡に棲込むのである。實際ペテロは自身が後に叫んだ、(使徒行傳一五・六一―一)唯一の救主イエス・キリストの御名を拒否して、來るべき凡ての兄弟の上に先祖達も負ひ能はざりし重き軛を負はせんとする福音拒否の行動をしたのである。之に對し福音擁護の戰士としてパウロの激怒が眼の前々浮ぶ様である。

願はくは律法をして律法の分を守らしめ、唯吾等の肉の體だけを支配せしめて、決して吾

等の良心を支配せしむることなかれである。汝の良心は唯イエスの恩恵にのみ支配さるべきものである。

第五回講壇

第二章 一五我らは生來のユダヤ人にして罪人なる異邦人にあらざれども、一六人の義とせらるゝは律法の行爲に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。これ律法の行爲に由らず、キリストを信ずる信仰に由りて義とせられん爲なり。律法の行爲によりては義とせらるる者、一人だになし。
一七若しキリストに在りて義とせられんことを求めて、なほ罪人と認められなば、キリストは罪の役者なるか、決して然らず。

傳統や儀式・割禮等の問題から何時の間にか本書翰本來の目的たる律法の否定と信仰のみによる義に及んでゐる。そして彼はたとへ律法を完全に果し得たとしても、それによつては

義とされないと主張してゐる。(二・一六以下)

「律令の行爲に由りては義とせらるゝもの一人だになし」即ちあらゆる律法の義を總括的に否定してゐる。舊に律法の中の儀式・式典、或は斷食、或は割禮等をいふのみでなく人間の道徳即ち己の義を立てんとする一切の營を否定してゐる。即ち此の言葉は「義人なし一人だになし、善をなすものなし一人だになし。」といふ人間義が絶対に不可能であることを意味するばかりでなく、たとへ律法の行爲を完遂することが出来たとしても、それによつては神の前に義とされないことまで意味してゐることに注意を要するのである。

「その子いまだ生れず、善も悪もなさぬ間に神の選の御旨は動かす……………」
(ロマ書九・一一)

「然れば欲する者にも由らず、走る者にも由らず、ただ憐みたまふ神に由るなり。」
(同九・一六以下)

或はコリント前書第四章四節、

「我自から責むべき所あるを覚えねど、之によりて義とせらるゝことなければなり」

等を参照すれば、律法の義の全面的否定は自からキリスト・イエスを信する信仰即ち神の恩恵のみによる救を提唱することが明かである。

パウロはいふのである。モーセの律法を誇り自からをその律法の實行者だとするものはその律法を破る以上の大罪を神に對して犯すものであると。ルーテルも「死に値する罪について」いふ。「モーセの誠命〔十誡〕の如きもののみを口にしつゝ神の恩恵にすがらる様子をやる盲目、心の中に神をあなどり神を否定する様な不遜忘恩の謙遜こそ實に死に値するよりも大きな罪であることを彼等法王黨は知らないのである。」といつて、些少なりとも信仰に律法を加味する徒輩を誣つてゐる。肉の行爲は本能的のものであつて、肉の體の弱きより來るに比し、この心の中に於て犯す罪は肉の犯す罪より幾層倍重きものなるかを知らないほど大であるとパウロは痛罵してゐるのである。これは實に神の恩寵を深刻に經驗するもの言葉でなくてはならぬ。

パウロは偽善者の標本として回心前即ちダマスコ途上以前の自分の姿をまざまざと見せつけられてゐる。その當時は自から罪人であることを感じなかつたけれども、今日となつては

實に嘔吐を催すべき邪惡の姿であつたことを知り、それは到底ゆるされざる罪人であり最も憐れむべき偽善者の標本としか思へないのである。この深刻なる經驗の率直なる告白が十六節の言葉である。

しかもかくの如きものを尙ほ憐れみによりキリスト・イエスの中に取り入れ給うた神の恩寵の前に、己の義を立てんとする凡ての人間の頑迷な心事を誼つても誼ひ切れなく思ふのであらう。己の義を立てんとする如きものはパウロにとつては己の腹を神とするものであつて如何にその態度が敬虔に見えてもその傲慢の蔽ふべくもなく實に死に値する罪人であるのである。信仰を口にしつゝも自から恩寵を受けるに適はしいものとする様なパリサイ人やユダヤの偽兄弟の様な傲慢なものの外形的の功績や行爲に對して神の恩恵が下賜さるゝ道理があるであらうか。

神に「汝の罪赦されたり」と宣せられたもののみ神國の民籍に入るのであつて、その外の何人でも入國は出来ない。然らば如何にしてこの救の恩恵に浴することが出来るであらうか。ユダヤ教徒はいふ「審判の神の與へし律法の教を完うするものである」と。パウロはいふ

「否、キリスト・イエスを信するもののみ」と。即ち神は主イエスを信するものをその状態の如何にかゝはらず義人と認め給ふ。もつと突き込んで言へば、己の無智と忘恩と嬌慢と無力とに泣き、罪は常に己にあることを沁々と思つて、その罪人を招かんために來り給ひ、其の罪人のために十字架に釘づけられた主イエスを仰視することによつて義と認めらるゝのである。

然し信仰によつて義とせらるゝといふことはその罪を赦されて子として遇せらるゝことを意味するは勿論であるが、同時に、主の愛の能力によつて（主の内在によつて）義の實質をも我が有とすることが出来るものとせられたことを併せ意味するのである。

神の義は主の十字架によつて外から吾等に與へられると共に、主の靈が吾等の内に働くことによつて信するものの生命に實を結ぶ所の可能性を附與さるゝことを意味するのである。故に主が其の十字架上に爲し給ひし事と、主を信する罪人の裡になし給ふ事との間に截然たる境界線を劃する事は困難であつて、基督者にとつては罪なしと認められた現實と、清められた將來への希望との中に求道の一路を辿るのである。基督者は信することによつて義と

認められたのであつて實質は未だしである。尙罪は吾等のものであり、吾等が此の世にあらん限りは罪は吾等の肉の體につき纏ふであらう。そのみならず、時々聖靈をはなれ、キリストを見失ひ不信の罪にさへ陥るであらう。しかも「罪は汝等の主とならぬなり」「汝等は既に潔し」との主の宣言を聴くことによつて常に主イエスに立ち歸るのである。實に罪は常に吾等基督者にある。しかもそれ故に神を呼び、神に呻き、神に告白し、神にすがる。ここにこそ義の實質をも許さるゝ契機が存在するのである。これ以外に人間の善はなく、また善なる業も成就されない。(個人のことのみでなく社會とその文化の状を見れば思ひ半ばに過ぐるものがあらう。) 基督者とは罪なく、又罪を犯さざるの謂ではなく、神が罪をきせ給はぬものの謂である。(ロマ書四・七)

かくの如き慰と勵とに充てる眞理が他にありや否や。蓋し眞理とは何か、曰く「神の愛」である。「神は愛なり」これが人間に與へられたる生命眞理の凡てである。(ヨハネ第一書第四章) この眞理が宇宙の中核であり、人生社會の文化は此の一點に其の好むと好まざるとにかゝはらず向ふのである。「神は愛なり」この一事ありて萬事定まる。人生に於ける一切

の眞理は唯この一點に發源し、この一點に歸着するのである。

一七若しキリストに在りて義とせられんことを求めて、なほ罪人と認められなば、キ

リストは罪の役者なるか。

キリストは律法ではない。キリストは更に嚴しく堪へがたき律法を課するために來り給はなかつた。彼は律法の下に呻いてゐる者を贖ひ解き放つために來り給うた。然るにユダヤ人のいふ處を率直に結論すると、「汝等若し律法の業をなさば救はるべし。然らざれば汝等が如何に主イエスを信ずるとも決して救はれないのである。」といふのである。又法王黨はいふ、(ルーテルの言)「主を信ずる信仰は義とさるゝ基礎だ。然し同時に神の律法を守らねば義とはされない。」と、そして「汝もし生命に入らんと思はゞ神の誠をまもれ」(マタイ傳一九・一七)の主の言をかつぎ出してやかましくいふ。然しマタイ傳一九章一七節の言は誠命を守ることが勧めたのではない。己が誠命を守り得ると過信し又守りつゝあるものだとの己惚れや、守つて來たと空嘯く頑迷不遜のパリサイ人に對する痛棒である。

主はどこまでも神の羔である。而してそれ故に律法をも完うし給ふのである。吾等基督者

は律法を完うし得ない。然し「キリスト・イエスに於て全うされてゐる」これをよく思はなければならぬ。「主は我等の義」といふことは此の意味である。

故に「行爲の伴はぬ信仰は詛はるべし」といふこの言葉は、イエスを審主・破壊者・人殺として却つてモーセを救主とする事である。それは「善行をなすものは永生を得、キリストを信ずるものは詛はるべし」といふに同じである。凡そかくのごとき事が聖書の世界の事であるであらうか。

第六回講壇

第二章 二〇我キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉體に在りて生くるは我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信ずるに由りて生くるなり。

「我キリストと偕に十字架につけられたり」パウロの此の言葉は、實に基督者の生命を極

めて端的にかつ明瞭に言ひ表はす言葉である。「キリストと偕に十字架につけられた。」とは如何なる事を意味するか。律法・罪・死に對して自分は死んだ者であり同時に、律法・罪・死は自分に對して死んだ者であるといふ意味である。最早律法とその詛には無關係な立場を示してゐる。それはキリストに倣つて十字架につけられたといふのではない。十字架上に主が我等の罪を負ひ給ふといふことは、律法も罪も主の十字架に於て死んでしまつてゐる事を意味するのであつて、吾等自からの中に死んでしまつたといふのではない。吾等の中といふ様な、そんな動搖し易い處に於ては、なく、ゴルゴタ山上に於てといふ確かなる客觀的事實即ち歴史的の事實なることを主張するのである。

「主が吾等のために凡てを爲し給うた」といふのである。吾等は律法下にある。吾等は猶罪をもつけれども主は吾等の聖であり、義であり、贖であり、吾等の凡てである。此の恩恵に對してこの主を信ずることによつて實に我等はキリストと偕に十字架につけられて律法と罪の詛から解かれたといふのである。

「我の今生くるは」で、余はかく信ずることによつて律法とその詛から救ひ出された故に

余は今こそ眞に生けるものであると。律法は余にとっては死せるもので無關係なものである。これが復活であり生命である。

もつと註釋的にいふならば、律法は吾等世にあらん限り繼續して吾等人の世を支配しよう。そしてそれが爲めに詛と審も又此の世に繼續される。然し主を信する信仰によつて律法は余に對して死んでしまつてあり、律法の詛も余にはとゞかないのである。それは信する者のみの光榮である。何となればキリストは律法と罪とを負うて吾等のために十字架に死に給うたからである。

最早我生くるにあらず」

余の人間人格、余の本質に於て生きてゐるのではないといふのである。パウロの生くるといふのは基督者の義のことをいふのである。即ち信仰による神の義であつて、個人の、人間の一切を除いた所にあるものキリストとその十字架が我の凡である。これが基督者の生くるといふことである。

かくなるためには吾等の良心の中に主イエスを迎へねばならない。もつとの確にいふなら

ば主と吾が良心とが一體となることを要する。これが信仰である。十字架にかけられた主、復活した主以外のものが吾等の良心の眼には見えない。これが緊要のことである。良心といへば直に律法や道徳が眼前につきまといふ。これではいけないから「良心と主と一體となる」といふのである。吾等の良心は唯神の恩寵のみに對して存し、道徳や律法に關係を持たぬことである。

良心的、良心的といつて若し自からをのみ見て主を端へよせる時、福音は吾等のものではなく、吾等は昔のまゝの律法、罪、死の中にあるのである。自分は何物であるか、何を爲すべきかといふ立場をとる時「われ神の國に入らんために何をなすべきか」であつて、吾等の義なるキリストを見失ふ。主は答へ給ふ「唯神の義を求めよ」と。

吾等が罪の重壓に苦しめらるゝ時、兎角この主の恩寵を忘れて自分の過去現在未來を考へるが、それは死より外はない。かゝる時こそ心を新にし目を上げて吾等の義なる主を見ねばならぬ。そして我を責むる律法と罪は十字架に釘づけられて吾は今かくあれども、それ故に主は吾等の義であることを思ひ思うて、決して律法・審きといふサタンの威嚇に恐れてはな

らない。

「キリスト我が内にありて生くるなり」

吾の實質はこの通りである。吾は正に律法の下に生活してゐる。又罪に支配され易い脆いものである。しかもその吾は主の十字架に於いて死んでゐる。地獄から神の國に移されたといふのである。

「キリスト我が内にありて生く」といふ事は勿論パウロにとつて、主の聖靈による内的經驗を持つものであらうけれども、その經驗といふも主の十字架の眞理に根ざすものである。この十字架に於いて殺され生かされるといふ客觀的の信條なくしては宗教的の經驗とは言はれないのである。

「今われ肉體にありて生くるは云々」

パウロは「我は生く、而して我は生きない。我は死せり、吾は死せず。吾は罪人だ、吾は罪人でない。吾は律法を有す、我は律法を有たぬ。」といふ様である。然しこれは皆にパウロ一人のことではなく全基督者について言ひ得ることである。如何となれば、實にパウロの此

の言葉は吾等自身の現實の状態を率直にいつてゐるからである。吾等は律法の下にある罪人である。それ故にキリストの十字架によつて律法に死して罪人ではないのである。

パウロはいふ、如何にも余は此の肉に生きてゐる。然しそれは「キリスト我が内にありて生くる生命の影に過ぎない。此の我の眞の生命は諸君が眼で見る事は出来ない。諸君は余が語り、食ひ、飲み、悲しみ、喜び行動するを見る。然し諸君は我が内なる生命を見るのではない。今生ける生命はたしかに肉にある。然し肉を通し肉によるにあらず、信仰によつて神の義に生きてゐるのである。肉體に於て生きてゐる様に見ゆる余は、實は我がために我が罪のために己が生命を捨て給ひし恩寵（信仰）に生きてゐるのである。」と。

キリストは人であつて人でない。神の獨子である。然しそのことは信仰によらなければ告白出来ないことである。それと同じ様に基督者と雖も外見上何等世の人と異なるべきものを見ない。然し兩者の間には超ゆべからざるギャップがある。これは自己肯定の言葉ではない。パウロの語る言葉は回心前に神を瀆し基督教徒を罵つた同じ口から出る言葉であるけれども、今は信仰により聖靈によつて神を讚美する言葉である。前の人間の智慧から出る言葉とはそ

の淵源する所を異にしてゐる。

「我を愛し我がために」

義とさるゝ第一原因がハッキリしてゐる。この言は律法の行爲を一切拒けるばかりでなく、信仰の様に見えてその實律法である所謂宗教をも拒ける。彼の律法主義者達のいふ様に、吾等人間の純粹なる決斷的意力をもつて神を喜ばす業をなし、かつ主イエスを何物にも優つて愛することが出来ると自からを買ひ被り、その事によつて神の恩寵を克ちとると考へる偽の敬虔は全面的に一步も假借なく否定する言葉である。

「我が爲に」といふこの我とは如何なるものであらうか。自から進んで神を愛し得ざる不具者ではないか。(ロマ書第七章) 神を愛してゐる様に見えても自己の利害の故にのみしかあり得ないみじめものではないか。「汝等憫むべきものよ。主は汝等の罪のためにその身を與へ給ひしならずや。……これを忘れてはならぬ。金錢・財寶・名譽・地位を與へるといふのではない。神の子がその身をである。殉教の死の如きものではないのである。實に測るべからざる深さ高さ廣さの愛である。(エペソ書三・一六一一九)

實に吾等は主のありのまゝの姿を仰視せんのみである。人間の理智や常識で見るとはなし。イエスのありのまゝさながらの姿を信仰をもつて仰視せんのみである。馬槽に誕生し給ひしものが救世主十字架上に晒されし主、吾等のためにその身を與へ給ひし主。この一條を喪失せんか。このありのまゝの姿を見失つては最早基督教は地上に跡を止めないであらう。

吾等は常に注意を怠つてはならない。律法が如何に主の名によつて我等にのしかゝり來れとも迷はされない様に。主の來り給ふ時は、恐れと悩み、破れ破れたる魂には何時も喜びであり慰めである以外のものではない筈である。この事を確認してサタンと律法の混成軍の襲撃に立ち對ふべし。愛なるキリスト、これぞ吾等が律法と罪に對する唯一の武器である。「迷へる一疋の羊」の深意や如何。

第七回講壇

第二章 二一我は神の恩恵を空しくせず、もし義とせらるゝこと律法に由らば、キリ

第七回講壇

四九

ストの死に給へるは徒然なり。

前節「我を愛し我ために己が身を捨て給ひし神の子を信するに由りて生くるなり」に續けて考ふるならば、二十一節の意は自ら明かである。神の子の死である。我等の罪のためにである。唯の人間ではない。イエス・キリストが吾等の罪のために死なれたのである。而も所謂犠牲の死ではなく、殉教の死でもなく、吾等の罪のために御自身を與へ給うた死である。此處に到つて最早、律法の義、信仰の義を云々する必要はなき程明かであつて、「我はキリストの死に給へることを徒爾にすることは出来ない」といふ。これがためにパウロは自から義たらんとする一切の道德律法の義を排し、又等しく基督者といふものの中でも、自から意志し行動することによつて神を愛し得ると考へる様な信仰や思想を排斥するのである。蓋し如何なる罪と雖も神の此の恩恵、この愛を軽くおろそかにする事にまさる程大なる罪はないからである。

一體罪とは何か。即ち神のこの愛に對して背を向けてゐる態度である。此の罪から人生の様々の罪の様相が出て来る。而してキリスト・イエスの溢るゝ此の愛憐に對して無關心な心

の態度であるならば、如何に敬虔に見ゆる基督者でも大罪人といはねばならぬ。主の死は殉教の死ではない。神子イエスの吾等の罪の贖の爲の死である。このキリストの十字架の死を認めてゐながら猶かつ律法の義によつて救はるゝといふならば、キリストの死は一體何の死であらうか。かくの如き徒爾なことではないのである。

「我は神の恩恵を空しくせず」

一句味ふべし。「唯罪人たる自分が神の義を得んために神の恩恵を空しくせず」とのみ解するは皮相の見である。それ以上のものがある。聖き感激である。最早己の罪赦されて義を與へらるゝといふ功利的の境から抜け出でての感激であつて、「キリストの苦にあづかる」てふパウロの信仰・思想・生活態度は此の感激から出たのである。自己中心の生命から神中心の生命に甦れ變つたのである。之がパウロの此の言を叫ぶ所以である。罪の赦し即ち義とさるゝ事は、この自己中心から逃るゝ事を意味する。基督教は自己の救に出發するが、それは本質的には非自己である。自己の救に出發し、そして常に救はるゝ新しき罪人として、しかも非自己的の心の態度をとり、他の救のために祈り働き、又主イエスの御苦に自からも與

からんとするのである。然るに世には基督教を個人主義だといふ者が多い。如何にも基督教は個人の救に出発する。人間が如何に道徳的に生きようとしてもそれは不可能な事で、心中は自己中心(即ち個人主義)を離れ得ない。その真相を深刻に味ひ知つたものがこの個人主義から解放されて、自他に生き公に奉ぜんための信仰である。個人の救に出発するが決してそれに留まらず殆んど同時に自他である。純粹に非自己がありとせばそれは基督教に於てのみ見ることが出来るのであると余は信ずる。世人のいふ様に、個人の罪からの救を有たざる滅死奉公などがあると考へるならば吾人は唯々長大息するのみである。その迷妄、その頑迷や救ふべからずである。公に奉じ、君國に殉ずるといふ事も、滅死奉公といふ題目の提示ではどうにもならない。滅死奉公も結局、個人の自由意志から出るのでないならば本當のものとはいへない。己の罪のために神の恩寵にすがるといふことはそれ故に所謂自己中心とは黑白の相違があるのである。基督教は神中心である。故に社會生活に於て自己中心ではあり得ないのである。

基督教の神と、國の主權について——

神の下にあつて人類は皆同胞である。然し國家の存在は、又神の御手の中にあるものであつてその國の主權は神のよしとし給ふ所のものである。或は王、或は民主、此の故に我國人としては決して國を忘れ去つて、空想的なコスモポリタンを考へてはならず、考へられない。地上の人間は必ずや一國の民籍に屬する者である。何れの國にも所屬しない者即ち歴史を有しないコスモポリタン式の人間の存在しようがない。吾等日本人は此の世にあつては、(即ち見ゆる世界にあつては) 天皇陛下に忠良なるべきを神は求め給ふことも亦自明の理である。然し、國を愛し君に忠なる事の内容に到つては大小高低深淺があらう。吾等は内容のより大・高・深ならんことを希ふものでなくてはならぬ。

第八回講壇

第三章 一愚なる哉、ガラテヤ人よ、十字架につけられ給ひしまゝなるイエス・キリス

ト、汝らの眼前に顯されたるに、誰が汝らを誰かしゞぞ。二我は汝等より唯この事を聞

かんと欲す。汝らが御靈を受けしは律法の行爲に由るか、聽きて信じたるに由るか。三汝らは斯くも愚なるか、御靈によりて始りしに、今肉によりて全うせらるるか。四斯程まで多くの苦難を受けしことは徒然なるか、徒然にはあるまじ。五然らば汝らに御靈を賜ひて汝らの中に能力ある業を行ひ給へるは、律法の行爲に由るか、聽きて信ずるに由るか。

信仰に依る救をガラテヤ人の心の經驗に訴へてその反省を促がさんとす。
「愚かなる哉、ガラテヤ人よ」

愛する者に對しての憤怒の叫である。兄弟よといはずガラテヤ人よと。實に愚かなる哉だ。馬鹿者—實に愚といはずして外に何といはうか。然し、かく叱責さるゝ者、獨りガラテヤ人のみではない。全基督者は常にパウロの此の叱責を聽くのである。吾等はガラテヤ人と等しく己が中に巢喰へる偽兄弟、即ち己が譽を求めんとする己惚根性をもつて、神の前に何かを爲さねばならぬと思ふことによつて、神の與へ給はんとする恩惠の義を忘れて顧みない。天國にも惡魔がある。吾等は恰も小人玉を抱いて歎ありの状態である。此の尊き福音、御

靈による救に入らしめられ、ひたすらに御言に聽かん事を心に願へども、吾等はなほ肉なるものにて神より離れて何をかなさんとする人間中心の惡を所有してゐる。基督者たる吾等の地上に於ける現實の狀は實にかくの如きものである。不信と不虔と不義と無智とは主を信ずることによつて葬られた。然しなほ不信と不虔と不義と無智の中に吾等を虜にせんとする肉と罪とは吾等の中に存在してゐるのである。故に一度神を知り、その義に與かつたとて速かに且つ根本的に新らしくなり潔くなると考へてはならない。かく考へることは却つて吾等の裡なる偽兄弟にあざむかれて絶望の果は福音の恩惠より墮つるにいたるのである。實に何人も此の怪物の誘惑に誘はれるのである。眞に喜ぶべきキリストを喜ばずして己の義、律法に對する少しばかりの己の行爲に一喜一憂の有様である。

吾等の状態は恩寵と律法の中間を逡巡徘徊する有様である。然しかくの如き惡意の誑の中にありてこそ、キリスト・イエスに在りて吾等の信仰は信仰より出で、信仰に進む事が出来るのであらう。斯の如き現實の様である吾等も死に到らぬ、即ち恩寵よりは離れないであらう、キリストは常に吾等の勝利者であるから。サタンの力は如何に偉大であつてもキリスト

の愛は更に大である。「我弱き時に最も強ければなり」てふパウロの叫は、己の義を立てしめんとするサタンに惱まされ続けるものの體驗の叫びであり感謝の叫びである。

「十字架につけられ給ひしまゝなるイエス・キリスト、汝等の眼前に示されたるに、誰が汝等を誑かせしぞ。」

彼等ガラテヤ人の經驗を喚び起して、律法の義に復歸せんとしつゝある彼等こそ再び主イエスを十字架に釘付けんとするものであると警告を發してゐる。蓋し恩惠の赦に歡喜せしは福音によるのであつて、律法の行爲でないことは彼等と雖も承認せざるを得ないことである。律法によつて得たものならば聽きて信じたことによるものでなく、聽きて信じたものならば律法の行爲によるものでないことは明かである。二者は常に正反對に立つ。その一つでなければならぬ。

「我は汝等より唯この事を聽かんと欲す」

汝等は如何に永い間律法下に在りてその命する處を爲さんと努力を續け、日曜毎にモーセの誡命を教へられて來た。然しそれによつて少しも御靈を受けなかつた。然るに一度福音を

聽かざるゝや、それを受けた瞬間、汝等は御靈を受けて神の恩惠に充たされたではないか。

汝等が如何に熱心に律法の命する處を完うせんと夜を日に繼いで苦業に苦業を重ねて來たか、それを空しき業ではなかつたのか。(ロマ書一〇・二―三)(同九・三〇―三二參照)律法を完うせんとして取越苦勞をする人間を神は喜び給ふのでなく、律法に對する己の義に失望して「汝の罪赦されたり」との宣言を聽かんと願ふものを嘉納し給ふのである。この事を確く認識せよ。異邦人(モーセの律法をもたぬもの)が義とされたこと而して律法を持つたイスラエルが義とされなかつたこと、それは一體何を意味するか。音にかゝる客觀の事實のみに止らず汝等の心經驗に鮮かなるものがあるではないか。

使徒行傳は聽きて信じ御靈によつて義とされたものの記録である。ペンテコステのことでなく……ペテロ、パウロ、ステパノ、曰く何曰く何……等々記するに違なき程である。彼等は彼等自身の爲せし行爲によるでなく、福音を聽いたことによつて御靈の啓導を受けた。彼等は唯座して、黙して聽きしのみ。

或はいふであらう、彼のユダヤ人のみでなく、現代人も亦我等の心の一偶でも。即ち「律

法を道徳を日夜守つてゐるものが神の前に義とされなくて、律法を有たぬものが唯聴くばかりで義人と認めらるゝといふ、そんな馬鹿氣た事があり得ようか。」と。これ福音に躓いてゐるものゝ言だ。嗚呼人よ、現代人よ、實に諸君は躓く石に躓いてゐるのである。人生の悲惨これより甚だしきはなしである。(使徒行傳一五・一一一参照)

吾等はガラテヤ書の根本を讀破せねばならぬ。それは嘗に福音を現代より、羅馬教より、ユダヤ教より、護るのみでなく、實に律法は吾等の弱きにつけ込んで吾等を惱まし、亂し、吾等の信仰を奪ひ去らんとするから。神の義は、吾等の行爲、人格そのものにあるのではなく、キリスト・イエスを信する信仰のみにあるのである。律法を聽いて行ふことになくて、福音を聽いて御靈を受けることにあるのである。

律法は爲事を召し、命令をするけれども吾等を義としない。然るに吾等を義とする福音はそれを「受けよ」と告知するのみである。「マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により思ひ煩ひて心勞す。されどなくてならぬものは多からず、唯一つのみ。」と。神の恩恵の限りなき大と、己の卑小とを比較する事勿れである。卑小なる自からを投げ出して主に走れ。

然し「信仰によりて義とされた者」即ち基督者も常に、「律法を守らねば」とのさゝやきを内に聴くのである。福音の義が吾等唯一の人生指標であることを確認しつつも、律法こそ人生唯一の目標であるかの如く成されるのである。

パウロはいうた、「我は肉なるものにて罪の下に賣られたり」と。然し此處にこそ基督者の不斷の祈(戰)があり、祈の必要がある。基督者の生活は戰だといふ。それは決して律法の義を完うせんとする戰ではなく、信仰對律法の戰である。吾等は聽くことのみによつて義とさるゝことは不合理だと思ふ内なる律法主義者と戰はねばならぬ。律法の完うさるゝことは唯信仰の世界に託しておけばよい。

六録して「アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり」とあるが如し。七されば知れ、信仰に由る者は、是アブラハムの子なるを。

「アブラハム神を信じその信仰を義と認められたり……」
アブラハムは律法を尊重し、これを守り、そしてその人格も高く大きかつたであらう。然るにそのことによつて彼は義とされたのではなく、信仰によつて義とされたのである。彼も

一個の人間であつてみれば、外形は如何にもあれ、實は罪に蔽はれたる一個の不義者に外ならない。信仰を抜きにしては彼は義とされなかつた。人間の凡ての努力も御靈の扶けなくしては義とさるゝ何等の扶けにはならないのである。

第九回講壇

第三章 六録して、「アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり」とあるが如し七されば知れ、信仰に由る者は、是アブラハムの子なるを。八聖書は神が異邦人を信仰に由りて義とし給ふことを知りて、預じめ福音をアブラハムに傳へて言ふ「なんぢによりて、もろもろの國人は祝福せられん」と。九この故に信仰による者は、信仰ありしアブラハムと共に祝福せらる。一〇されど凡て律法の行爲による者は詛の下にあり。録して「律法の書に記されたる凡ての事を常に行はぬ者はみな詛はるべし」とあればなり。

△六、七―九 主を信する者はアブラハムと共に義とさるる。

△一〇―一一 律法の下にあるものは詛はるべし。〓律法の行爲では義とされず。

「録して「アブラハム神を信じその信仰を義とせられたり」(三・六)「されば知れ、信仰に由る者は是アブラハムの子にして、アブラハムと共に祝福される」と。今迄ガラチヤ人自身の經驗に訴へて彼等を責めたが、今やパウロは聖書の示す歴史の實例を採り來つてガラチヤ人を攻撃しその反省を促すのである。

其の信仰を義と認められたのであつて、其の行爲によるのではないのである。この言の反面は律法主義者は如何に努力し、如何に熱心に祈り、如何に嚴格に誠律を守りかつ自から十字架を負うたとしても、決して義とされず、依然として詛の下にある事を意味する。彼等は傲慢にも自力で神の怒を静め神をなだめることが出来ると信じ、外的のかゝる行爲によつて神の恩寵を勝ち得ようと思つてゐるが、それは神を前にして、己を誇示せんとする事である。眞實にして憫みある神を、怒り詛ひ審く神であるとし、その怖ろしき怒を自分の自己中心的な俳優的な、獨りよがりな行爲でなだめることが出来ると信じてゐる。これは神を伴りもの

とすることであり、主の愛を徒爾なものとして、否定拒否することであつて、神の位に自分を据ゑキリストの座に自分を置き代へることである。基督者の義は心に信することと神の恩恵とによるのであつて、信仰は其の一半に過ぎない。信するだけでは得られない。神の憫が第一原因である。基督者もなほ肉をもち肉に生きることに變りはない。信仰を有つたからとて罪が無くなつたのではない。ここに神がその信仰を義とし、罪人なる吾等を「汝等は既に潔し」と宣し主の日まで待ち給ふのである。

(信仰) 十 (義認と完成へ) 〓これが基督者である。

吾等は地上にある間、どこまでも主イエスの翼によつてその罪を蔽はれて、完きを目指して歩むものである。故に基督者が自からの罪に苦しみ、誘惑に悩み、神の怒を思ふ時は吾等の凡てであるキリストに走つて安全なることが出来るのである。神も亦吾等がキリストに走ることをよしとして決して其の罪を視給はず、義人として取扱ふのである。(コリント後書五・一九)そして「汝は尙多くの罪を有つ、然し吾が獨子の故に汝の罪はゆるされたり」と宣し給ふのである。これが恩寵である。吾等は罪に對して無力であるばかりでなく、其の信仰も

亦芥種にも比すべき程のものである。だから神、義認を要するのである。

あからさまに言はゞ基督者は義人であつて罪人、聖者であつて不義者、神の味方であつて同時に神の敵である。何によつてか、信仰によつてである。第一余等自身の中に罪を感じる時、何條義人といひ得よう。何條神を父よと呼ぶことが出来よう。然し吾等は自他共にハツキリ言ふべきである。「汝自から罪を自覺し罪に悩むはそれこそよき兆である。神に感謝せよ。決して失望する勿れ。それこそ健全な歩を續けてゐる證據だ。病人が自分の病を認めたと同様に喜ぶべき兆である。」と。そして醫者たるキリストに走れ。彼は心の病を癒し給ふ唯一の主に在るのである。かゝる時吾等は決して己が理智の審判に耳を藉す勿れ。理性は必ず「神は罪を赦し給はない」と告げるからである。理性は汝を脅かし汝を失望せしめるであらう。

七されば知れ、信仰に由る者は、是アブラハムの子なるを。

これはユダヤの僞兄弟達に對して眞向からの痛撃である。信仰によるもののみアブラハムの子孫であつて血肉の繼承は決してアブラハムの子孫といふことは出来ない。「血肉は神の國をつぐこと能はず」この事をパウロは聖書によつて論ずるのである。(ロマ書九・六一―八參照)

神の約束は信仰のみに對して下される。律法には約束は與へられてゐない。蓋しユダヤ人の誇りとする所はアブラハムを祖先に有つてゐることである。この最大の誇りに對してこれ程手痛い攻撃はない。いかにもアブラハムは血肉に於ては汝等の祖先である。彼は又律法を持ち汝等も律法の下にある。然しアブラハムは其の事によつて義とされたのであるか。アブラハムは何によつて義とされたかを直視すべし。彼はその優れた才能、其の徳、その業で義とされたのではない。又律法を嚴守したからでもなく、イサクを捧げんとしたその行爲すらでもない。その信仰を義とせられたのである。律法を守ることによつて若し吾等が義とされるならば、アブラハムの如きは一層義とさるゝ特權を有つ。然るに彼は彼の信仰以外のものをもつて義とされなかつたのである。

此處にパウロはいふ。信仰あるもののみアブラハムの裔であつて、神の前には血肉關係といふ様なことは意味をなさない。アブラハムは血肉の父でなく信仰の父である。彼は信仰の子孫を残したことを神に喜ばれたのである。アブラハムと雖も一個の人間であつて、罪を有ち、罪に悩み、罪に穢れ、信仰によらずしては罪を赦さるゝことは出来なかつた。

或は言はん、「アブラハム神を信じ、吾等も亦神を信ず」と。アブラハムは彼に約束し給ひし神を信じた。即ち來らんとするキリストを告げ給ひし神とキリストを信じた。故に吾等は既に來り給ひしキリストを信受しなければならぬ。而してキリストを信ずるといふことは決して己の行爲や己を過信すること許さない。

さてアブラハムの優れた行爲や業績、その徳が義とされたのでないと等しく（ルーテルの言）吾等もキリストに倣ふといふことで義とされるのではない。神の前に義とさるゝには人の義の様な外面的のものより遙かに高價な代價が要求される。それは己に生きないといふことである。天上天下最も信じかつ頼りになるものは己であり己の心であるといふ人間の誇を捨て去ることが求められる。キリストは御自身を模範として提示し給はないのである。

一〇されど凡て律法の行爲による者は詛の下にあり。錄して、「律法の書に記されたる凡ての事を常に行はぬ者はみな詛はるべし」とあればなり。一三律法は信仰によるにあらず、反つて「律法を行ふ者は之によりて生くべし」と云へり。

「これど凡て律法の行爲による者は詛の下にあり……」
「律法によりて義とせらるゝことな

きは明かなり……」

吾等基督者と雖も、此の世の生活に於ては律法を尊重する。然し靈なる世界、即ち、義の世界に於ては一切の律法とその行績を排斥せねばならない。そして吾等の眼の前に唯信仰による祝福のみを見なければならぬ。即ちキリストが救主であることを確認するのである。

この眞理を認める時、その反對の事も確認しなければならぬ。即ち律法の下にあるものは詛の下にあるといふことである。このパウロの解釋を皮肉に解していふであらう。社會の攪亂者であり、國賊であると。然し基督者は肉の祝福と靈の祝福とを截然區別して混交してはならぬ。吾等は此の世に在つては君主或は王を戴き、法律や、政治を有し、妻女を有し、子供を有ち、家をなし、主人を有す。土地も財産も地位ももつ。これは祝福である。然し吾人は如何に此の祝福を喜び誇つても、これによつては罪の詛からは救ひ出されることは出來ない。吾等は決して法律を否定し世に反逆するものではない。吾等は却つて忠實に國に仕へ、皇國を愛さんとするのである。然し靈性の祝福に關する限りパウロはいふのである。大膽に「凡て何人たりともアブラハムの信仰と約束によらざるものは永遠に詛の下にあり」と。

讀者よ、此處にアブラハムといふことは、「信仰」の事をいふのであつて、外國人をいつてゐるのでないことに注意せよ。

パウロはいふ。「律法の行爲によるものは詛はるべし」と。然るにモーセはいふ。「何人たりとも律法の行爲によらざるものは詛はるべし」と。兩者の主張の互に相容れないことは恰も福音と律法の關係の如くである。而してこの相容れないことは直に「律法の行爲と信仰から出づる行爲」との相違をも意味する。律法の義を立てんとして律法は決して完うせらるゝものでなく、信仰によつて聖靈降下により、なし得ざることが可能となつて律法が完うされる。ユダはベテロやヨハネと共に律法遵法者であつたが詛はれた。然るにそのベテロ、ヨハネは信仰によつて靈性の祝福を受けた。

十一節でパウロは大聲叱呼していふ様である。最早何をあげつらふ必要があらう。「義人は信仰によりて生くべし」とあるではないかと。汝等は信仰ブラス行爲といふ。然しそれは依然として舊人の世界に居ることである事が判らぬのか。アブラハムと等しく信仰をもつといふ汝等は己を信じ己を神としてゐるのである。ユダヤ人のみでなく或は大多數の基督者も

又（信仰）十（行爲）所謂ヤコブの行爲の伴ふ信仰を完全なる信仰であると考へてゐるであらう。然し途方もない間違である。ルーテルはいふ、「羅馬教徒たちはいふ、「信仰は聴くにより與へられるものとせば最も悪しき罪人と雖も信仰を有つことが出来るではないか。そんな不合理はない。信仰は内に生長するものであつて、それに善行を附加して初めて完全だ」と。結局「彼等は、聴くによりを拒否して、行によりを主張するもの」であつて、キリストは彼等にとつては關係のないものである。キリストが罪人のために來れることゝ、彼等自からは罪人なることゝを知らず、却つて自からを義なるもの尊貴なるものとして他を賤しむものである。」と。

第十回講壇

第三節 一二律法は信仰に由るにあらず、反つて「律法を行ふ者は之に由りて生くべし」と云へり。一三キリストは我等のために誼はるゝものとなりて律法の誼より我ら

を贖ひ出し給へり。録して「木に懸けらるゝ者は凡て誼はるべし」と云へばなり。

一四これアブラハムの受けたる祝福のイエス・キリストにより異邦人におよび、且われらが信仰に由りて約束の御靈を受けん爲なり。

主題は十三節、先づ信仰と律法との關係について――

「律法は信仰に由るにあらず、反つて「律法を行ふものは之に由りて生くべし」と云へり」即ち律法に従へば、何物かを（行爲）神に捧げなければならぬ。信仰に従へば何物をも（如何なる行爲をも）要求されない。唯神の約束を信じ神の與ふる恩賜を享ければ足りるのである。

律法は働く （行爲）

信仰は聴く （約束）

この四つは明瞭に區別しておく必要がある。

神の約束と律法とは天地の隔絶があるやうに、信仰と行爲は天地の隔絶がある。毫末も混交する處がない。然るに是を混交するものは人間である。「信仰は律法の行爲でない」とい

ふ時「それでは如何なる善行も否定されるか、或は又如何なる悪行をしてもよいか」とは福音の眞理を知らない人達や律法主義の基督者達の好んで用ゐる言葉である。然し神の恵なる罪の赦の福音は人の行爲には關係はないのであつて唯信仰のみが唯一の條件である。然しそれは信仰は怠けてゐることを意味しない。信仰はそれ自身決して怠者ではあり得ない。ダイナミック（動的）である。信仰は神の能力である。加之律法の完きは實は信仰によらなければ不可能なことである。「我は律法を毀たんとために來れるに非ず、反つて成就せんために來り」(マタイ傳五・一七)と主はいひ給ふ。行爲は信仰に伴ふ、だからといつて信仰は行爲ではないのである。

この意味に於て信仰ある者は律法をも爲す。然しそれは最早彼の行爲ではないのである。キリスト彼にありて爲すのであつて、その行爲は賜である。

かくして律法の行爲に立つ以上、如何に忠實に律法を守らんと努力の生涯を送るとも、詛の下にあるのであり、主を信する信仰のみに生きるものは恩恵の中にあるのである。

一三 キリストは我等のために詛はるゝ者となりて律法の詛より我等を贖ひ出し給へり

録して『木に懸けらるゝ者は凡て詛はるべし』と云へばなり。

彼御自身には何等詛はるべきものがない。彼は木にかけらるべきものではない。モーセの律法によれば盗人殺人等は木にかけらるゝのである。吾等こそ實に詛はれて木に架けらるべきものである。それ故に主は吾等のために我等の罪を御自身に負ひ給うて木にかけられた。この事は全聖書によつて指示されてゐる。そして又聖靈によつて凡ての豫言者達が指示してゐる。キリストは最大なる殺人・姦淫者・叛逆人・冒瀆者となつて木に架けられたのである。それが舊新約六十六卷凡てが語り指示する焦點である。「彼は全世界のために犠牲となつた」といふことは、つまり「女より生れ、神人となり、罪なき神の羔が極悪非道の者とされて木にかけられた」といふことを意味するのである。故に彼が十字架につくや最早、罪なき清きものではなく、處女より生れし神の子ではなく、罪を負ひ罪に惱む人としてであつた。此處に深刻なる神の犠牲、神、人となり給ふ、の意味がある。

主は冒瀆者の最大なりしパウロの罪を負ひ、叛逆者の最大なるペテロの罪を負ひ、姦淫と殺人とをなせしダビデの大罪を負ひ給ひ、主の御名を恥かしむるあらゆる異端者の恐るべき

罪を負ひ給うて木にかけられた。(イザヤ書第五十三章参照)

化身といふことは單に主が吾等罪人の中に交り味方したまうたといふのではない。彼は罪人の友となりたまうた、けれど、それよりもつと重要なことは眞に冒瀆であり、盗人であり殺人であり叛逆者であり、不義者不信者である。吾等の肉と血を彼の御一身の上に執り給うた。そして律法の詛の下に徹底的に詛はれ給うたといふことである。

故に吾等は主を仰ぐに、その御足のあとを追うて模倣すべき人生のお手本として仰ぐ人達の様子に仰ぐべきでない。主は吾等の、否この私の罪を御一身に纏ひ給うた。それ故に吾等は吾等の一切の邪惡、一切の罪をもつて蔽はれてゐる主の姿を仰ぎ見なければならぬのである。實に十字架上の主の姿こそ、詛はるべき吾等自身の姿である。

若しこの事實を否定して神の子イエス・キリストが詛はるべき罪人ならんやといふならば、たとへば「主は吾等のために罪人となつて十字架に架けられた」といつても實は主は吾等には何等の關りなしに十字架に死に給うたといふことであつて、それは「神の子イエスは犯罪者であつてそれ故に十字架にかけられた」といふ事に等しい。そんな矛盾はあり得ない。

パウロのいふ「神は罪を知り給はざりし者を吾等の代に罪となし給へり」(コリント後書五・一二)といふのは主の十字架の眞理を洞察してのことであつて、洗禮者ヨハネの神の羔「世の罪を除く神の羔」(ヨハネ傳第一章)と同意語である。

ルーテルはいふ「余も君等も既に犯せる罪、今有てる罪、來らん日に犯さん罪も悉く主御自身に犯せる又ははらめる罪の如くに彼御自身の上に負ひ給うたのである」と。換言すれば、吾等の罪、此の私の罪、不信も冒瀆も叛逆も憎惡も何もかも、キリスト御自身の罪となるのである。若しさうでないならば吾等は永遠に律法の詛の下にある悲惨状態を續けなければならぬ運命をもつてゐるのである。主の罪の贖には如何にしても人間の世界に於ける贖、例へば親が子の、先生が生徒のといふ様な意味よりも深刻な意味が有る事は否めない事實である。此の事を認めるでなければ主の受洗、或はゲツセマネの苦悶、受難、十字架上の七言等は到底理解出来ぬ。

翻つて思ふ。ユダヤ人の如く或は法王黨の如く吾等自からの功德なくしては救はれないといふ其の事は、吾等自からの行爲によつて自からのこの深刻な罪を抹殺し得るものと考へる

事で、若しそれが可能ならば主は決して吾等の罪を取り去り給はぬであらう。然るに、主は吾等のために犠牲となり、吾等の罪となり給うて木に架けられたならば、最早吾等は己の行爲によつて自からの罪を抹殺することが出来ない事は自明の理である。

故に吾等が「主は吾等の罪のために十字架に死に給うた」といふ時には眞劍にパウロと全く同じ告白をしてゐるのであることを深く考へねばならぬ。神は恰も吾等自身の行績によつて自からの罪から逃るゝことが出来ない様に主イエスを吾等に賜はり、これに吾等の罪を負はせて宣言する様である。「汝は彼の叛逆者のペテロたれ、汝はかの冒瀆者パウロたれ……ダビデたれ」と。斯くの如くして神は人間一人一人が唯その主イエスを信ずる信仰の故に最早各人の罪を見給はぬのであつて、嘗にそればかりでなく、彼を律法の詛から解き放つて神の義と清潔とを着せ給ふのである。

主イエスは聖の聖、最高なるものである。それが罪の最大なるものとなつた。此處に義と罪即ち愛なる神の義と人間の世界を支配する最大なる罪の力との戦が神の子イエスの裡に戦はれた。罪はその恐るべき偉力をもつ殘虐な暴君である。個人をも社會をも全世界をも風靡

てその支配下に置かんとする。教養ある者も無教養の者も、智者も愚者も哲人も義人も何もかも呑み盡す不可思議な力を持ち、何人の區別なく人は悉くその奴隸とされるのである。この暴君がキリストに襲ひかゝつた。神が「主に罪を負はせ」といふことはこの洞察と理解に立つて初めていひ得る言葉である。これが即ちゲツセマネの苦悶であらう。この神の義と罪との勝敗や如何。然るに此の偉大なる罪の力は主に於て未だかつて遭遇しなかつたものに出會つた。實に打ち勝ち難き聖なるものを見た。それは主イエスの愛であつた。罪は完全にその前に打碎かれた。未だ嘗て遭遇せざりし聖なるもの、それは主の愛である。神のアガペーだ。この愛の能力の前には如何なる罪の威力も克ち難いのである。この聖なるものは人間の思索の及ぶ極點である至上者とかいふ様な言葉で表はし得る神ではなく、キリスト・イエスの愛である。如何に吾等が腦漿を搾つて考へても人間の世界に淵源する處のものではないのである。神のアガペー、神の代表者なる愛、之である。この愛のみ罪の能力に對して永遠の勝利をなすものである。この二つの偉大なるものの戦に於て罪は打負かされて死に到り、義は打勝つて生き一切を支配するに到つた。即ち主に於て凡ての邪惡は打碎かれ葬ら

れ、義は永遠の勝利者として輝くのである。「汝等世にありては患難あり、然れど雄々しかれ、我すでに世に勝てり。」(ヨハネ傳一六・三三)「十字架によりて凱旋し給へり」(コロサイ書二・一三—一五) かくして吾等が若しこの主を仰ぎ見るならば罪も、死も、詛も、地獄も、悪魔も一切の邪悪は完全に敗北せるを見るのである。このイエスが憐の祝福を以て人の靈魂の中に入り給ふ時、そこには罪も、死も、詛も、サタンの暴力もないのである。之に反して主を知らざる處には罪の暴威と死と詛とのみがあるのである。

「おほよそ神より生るゝものは世に勝つ、世に勝つものは誰ぞや、イエスを神の子と信ずるものにあらずや。」(ヨハネ第一書五四—五)

十三節「キリストは我等のために詛はるゝ者となりて律法の詛より我等を贖ひ出し給へり」この言は實に重要である。之が福音の全部である。蓋し罪と死に打勝つことは造られたもの爲し得る事ではなく唯造主なる神の手中にのみあることである。而して聖書はこの聖なる力をキリストに歸するが故に、キリストは生命であつて義であり、祝福であつて本質的に神を代表するものである。

故に主の神聖を否定するものは基督教の凡てを見失ふ。キリストに於て義とさるゝといふことを信ずることは即ち主は神なりと告白することである。若し福音を信ずるといふて尙この恐るべき罪の暴力を自身の業によつて征服しなければならぬと考へ、かつ教ふるものは、「盲人の手引をする盲人」であつて、自分が強盜殺人よりも恐ろしき罪人であるばかりでなく他人をして強盜殺人以上の罪人たらしむるものである。ルカ傳十一章二十六節には「遂に往きて己よりも悪しき他の七の靈を連れ來り、共に入りて此處に住む。さればその人の後の状は、前よりも悪しくなるなり。」と。

主は實に吾等のために木に架けられた。そして甦り給うたが故に彼は今もなほ生きてゐるのである。それは吾等の目には見えない。かくして我らは主に在りて罪も死もなく永遠の義と生命がある。ルーテルのいふ様に「基督者は尙罪が見えかつ罪を感じることはあつても主のいひ給ふ如く『汝は既に潔し』と宣せられたものであることを忘れてはならない。そして實に主は吾等の罪を悉く負ひ給うてしまつた。それ故罪と詛の威嚇を感じてもそれは悪魔のなす悪夢の如きものであると思つて、決して信仰に失望し、これを棄てゝはならぬ。」と。

主を聖にして罪なしといふはよし。然し唯それだけに止まつてゐてはならない。彼はその聖をもつて吾等の罪のために自から罪となり、神の羔としてその寶血を流し給うたのである。罪は人類を窒息せしめる。それ故に主は吾等の罪となり、盜人となり姦淫者となり、殺人となり、不義者不信者となり、眞に邪惡なる吾等を抱いて贖ひ給ふ。その瞬間（イザヤ書第五十章）彼は實に罪の力に壓倒され、罪の激浪に洗ひ去られて神の審を受けられた。しかも父に對する忠順と罪人を憐れむ愛は「我神我神何ぞ吾を捨て給ふや」との呻の中にも微動だもしなかつた。彼は實にその聖愛をもつて罪と死を征服して吾等を律法の詛と神の審から解放し給うたのである。

第十一回講壇

第四章 一われ言ふ、世嗣は全業の主なれども、成人とならぬ間は僕と異なることなく
二父の定めし時の至るまでは後見者と家令との下にあり、三斯の如く我らも成人となら

ぬほどは、世の小學の下にありて僕たりしなり。四然れど時滿つるに及びては、神その御子を遣し、これを女より生れしめ、律法の下に生れしめ給へり。五これ律法の下にある者をあがなひ、我等をして子たることを得しめん爲なり。

主要點は、四節五節である。

「然れど時滿つるに及びては神その御子を遣はし、これを女より生れしめ、律法の下に生れしめ給へり。」

「これ律法の下にある者をあがなひ、我等をして子たることを得しめんためなり。」

即ち、前回の律法の用を敘する。

一、福音までの守役

二、福音への手引

一は此の世の生活に於いて個人を邪惡より拘束して邪惡を爲さざらしめ、所謂律法の善行即ち義務に引きずらるゝ善行をなさしめて社會の安寧秩序を保たしむるもの、然しこれによつて人は決して救はれない。其の本質に於て決して善をしてゐない。律法の義を如何に積

んでも律法は彼を神の國の人とはしない。吾等が盗みせず、人殺をしないからとて、又表面的の慈善公益を計つたからとてそれで義とはされない。

勿論律法の義は律法の刑罰からは逃れ、他人の賞讃を博する故にそれは俳優的の善であつて、これを意識してやつてゐる場合には偽善といふべきものである。かゝる義の中には毛頭神聖なものはなく、全く世につけるものであるが故にパウロは世の小學といふのである。

第二は律法の眞の用であつて、これぞパウロのいふ聖にして善なるものか。即ち人の良心を追ひつめて恐怖せしめキリストの救に眼を向けしめる用である。律法は神によつて與へられたものであつて、人間をその刑罰の恐怖に追ひ込み、そして自からの悲惨の状を知らしめるのである。斯くいへばとてパウロは律法を排斥してゐるのではない。律法はたしかにこの二つの用を果すに役立つのである。然し事信仰に關する限り律法は吾等の眼界から取り去らねばならぬ。神の義以外のことに於てはパウロも律法を尊重した。然し神の義に關して尙かつ律法が問題である場合には全く悪魔と同一視されるのである。

一、律法とキリスト

律法はキリスト以前には聖なるものとされてゐた。然しキリスト來つて律法は死である。

この事は單に歴史的に主イエスの來臨をもつて境界線を劃する許りでなく、來らんとする凡ての個人個人への主の來臨（即ち信仰の時）にも眞理である。主は歴史的には唯一度來り給うたが、個人個人の信者にはその回心の瞬間に來臨さるゝのである。その時律法は彼に對して死ぬのである。「キリストは凡て信するものの義とせられんために律法の終となり給へり」

（ロマ書一〇・四）

二、四節五節

パウロの基督觀が明瞭に提示されてゐる。即ちこゝでパウロは主の人格と其職分とを云つてゐる。四節「神その子を遣し女より生れしめ」これ神にして人を意味する。五節「律法下のものを贖ひ……」救主としての職分である。

「女より生れしめ」パウロにとつては處女降誕のことは餘り問題にしてゐない様に見える。神が罪人を救はんためにキリストを遣はしたといふ大事件の前には處女降誕の如きは問題でなく「人となる」で充分であつた。女（セツクス）だけで充分であつた。敢て性の神性（處

女) 降誕を高調するを要しないとしてゐる。ヨハネも亦パウロと感を同うした様である。「言は肉體となりて吾等の中に宿れり」(ヨハネ傳一・一四)といふだけで特に處女降誕を言はない。さてこの四節とヨハネ傳(三・一七、五・二四、一二・四七)等「夫れわが來りしは世を審かんために非ず、世を救はんためなり」を對照して味はゞ主が律法携帶者でないことがわかる。主は恰も宣し給ふが如くある。「余は律法を與ふるものとして汝等に來たのではない。律法以上のより善き贈物を持つて來たのである。律法は汝等を殺した。その律法の支配下にある汝等を救ひ出さんために、汝等と等しく律法の支配下にある者として來たのである。余は律法の携帶者(即ち審主)ではなく余の審は律法に對してであつて、余は汝等を審く暴君即ち律法ではないのである。」と。

然るに、かゝる憐みの主の前に立ちて我等の實狀は如何であらうか。口に「イエスは救主だ」といひながら、心の中の行爲では其の反對にキリストを律法携帶者即ち審主、壓制者、暴君……モーセよりも苛酷峻嚴な恐るしきものとして避けるのではあるまいか。實に吾等は時々パウロの此の提言を味ふ必要がある。

三、主は如何にして我等を贖ひ給ひしか。

彼は律法に對して權者の地位にありながら律法の僕となることによつてである。此處に於て、律法は全人類に對する暴威を振つて彼の上に押しかゝつて來た。主の誘惑、受難がそれである。しかも神の羔は罪を犯さなかつた。愛をもつて是と戰つた。この戰こそ實にめざましき戰であつた。人類史上後にも前にも見得べからざる、最大なる、最も凄慘を極めたる戰であつた。愛と力の鬭争である。

ゲツセマネの苦悶と十字架

自から防ぐに力なき人間を誑ひ殺す律法の下に主の來られた事は、即ち吾等の肉を御自身に取り、律法の支配下にあるものとしてその溢るゝ聖愛によつて、罪律法に抗し給うたのである。この愛の戰に於て、律法が却つて完全に誑はれ碎かれてその暴威は餘すところなく失つたのである。嘗に律法がキリストに對して力を失つた許りでなく、キリストを受け入れる凡ての罪人に對して力を失つた。主は言ひ給ふ「凡て重荷を負ふ者、吾に來れ、われ汝らを休ません」と。重荷とは何か、罪人に對する律法の誑の重壓である。(マタイ傳一一・二八)

神の羔の聖き愛の能力と律法（道德）の能力とを比較する時、嘗に日月の相違のみではな
 5。主の前の律法は恰も霜雪の日光に於ける様なものである。主はいひ給ふであらう。

「余は肉に於て律法の下に奴隸とされた悲惨な状態にあつた。余は汝等のために一度汝等
 の肉を吾が上にとり、そして律法の牢獄の中に人となつた。余は怖れと罪と、死の境に彷徨し
 神の詛をもつて責め來る律法の下に晒されて苦しんだ。然しさうすることによつて、汝等を奴隸としてゐる律法を粉碎した。それは汝等自身によつて律法を押しつけたに
 外ならない。何となれば『我勝利は即ち汝等の勝利であるから』（ヨハネ傳一六・三三）
 勿論律法は基督者の罪をあばき非難攻撃をやめぬであらう。然しパウロの此の提言が即ち
 救主イエス・キリストの御聖旨であつたことを知る者は其の都度大いなる慰を與へられるばかり
 かりでなく、律法に向つて大なるプライドを持ちつゝ言ふことが出来る。

律法よ、余は汝の威嚇には最早恐れぬ。汝は彼の神の羔を十字架に殺した残酷な叛逆者だ。かくする事によつて汝は余に對する汝自身の支配權を喪失した。獨り神の羔に對してのみでなく、彼を信する吾等に對しても同様である。何故ならば「主は吾等を愛する愛

によつて汝と戦ひ、その身を吾等に與へることによつて汝に打勝つたから。かくて汝は吾等にとつても永遠に死せるものである。」と。

以上が四節五節の意味であらう。

此の事は又信仰によつて義とさるゝといふ教義の裏付である。何となれば主と律法との戦
 の中に吾等の行爲の何物も介在してゐないからである。吾等は唯吾等の肉を纏ひ、律法の暴力の眞只中に愛の羔のみ戦ひ給ふを見るのである。かくしてキリストに對して大殺人、大冒瀆者なる律法は、キリストの名の叫ばるゝ何處にも同席することが出來ず、即時退却をしなければならぬ。實に「女より生れしめ、律法の下に生れしめ給へり。これ律法の下にある者をあがなひ……」である。

如何に見ようとも主は律法の先生ではない。律法の終りであり、律法に止めを刺した。律法といふ證書を塗りつぶした君だ。是が即ちイエス・キリストなりといふことである。

第十二回講壇

第四章 六斯く汝ら神の子たる故に、神は御子の御靈を我らの心に遣して「アベ、父」と呼ばしめ給ふ。七然れば最早なんぢは僕にあらず、子たるなり、既に子たらば亦神に由りて世嗣たるなり。

御靈の働きにつき略説(三・二―三参照)、聖靈は如何にして吾等にはたらくか、神の言を通してである。見るべき様にて來らず、然し神の言に心を傾けて聴くことによりて「我等の心燃えしにあらずや」といふ状態それである。此の性來の人間そのまゝでは經驗出來ない新生經驗である。回心そのものである。意識の轉換か價值標準の轉倒、これは即ち聖靈經驗である。故に此處にあり、彼處にありと人々言はざるものである。吾等はこの經驗を人に語らんとし、傳へんとして得ず、人は知らんとして得べからざるものである。聖靈經驗だからとて、特別に心内に一種不思議な作用が起るのだと考へるのは彼の所謂見神經驗、即ち主

觀的心理的の經驗を考へるもので、キリストの福音に於ては病的なものである。聖靈の働きによつて吾等は罪意識が明瞭になる。基督者として、依然として罪を負うてゐることに於て世の人と餘り違はない。罪を有ち、罪の中にあり又罪を犯すであらうが、然し罪に對する感覺が深刻になり行く、これも聖靈の働きである。否々、寧ろ吾等は此の罪の身の上に聖靈を興へられたことを知るのである。これ等のことは聖靈の賜でなくしてはあり得ざることであり、同時に理解されないことである。

外見からは此の世の人の如く、個人として又公人として、或は夫、或は妻、或は農工商、或は役人、教師として別に變りはないやうであるが、その本質に於ては千里の差がある。即ち慾、名利によつて携はるでなく、又義務に引きづられて携はるでもなく、使命として遣はされたものとして、恩賜として、感謝して携はるのである。神の器として喜んで携はるのである。更に進んでは福音のために忍び耐へ苦しむことも敢て辭しないのである。これ聖靈の扶であつて、人間的努力や決意から來る扶によるものではないのである。故に吾等は決して自からの現狀のみを見て聖靈の宿れるか否かを疑つてはならぬ。自からは聖靈の官(コリン

ト前書三・一六)なりと思はなければならぬ。聖靈の宮とは律法の義人を言ふのではない、信仰によつて神より賜はる聖靈を受ける罪人の謂である。

實際若しここに一人あつて衷心神の言を愛する心あり、喜んで是に聽かんとし、又是を語り傳へんとし、常にキリストについて考へる事を喜ぶならば、この心こそ彼自身の人間的理性や意志の働きて然るのでなく、聖靈彼にあつて働くのである。此の反對に福音に對して嫌悪する心が起るならばそれこそ惡魔の働きと見ねばならぬ。故に吾等は世の人と共に此の世の職務に携はるやその職の何たるを問はず、神の定めの中にあるものとし、悉く神を喜ばすに足るものとして考へ是を受け是に従事すべきである。然し實際はさう考へずに、「吾が職務は神の定めの中にあれど吾が身は果して神の喜び給ふ所でありや否やと思ひ惑ふのである。然しこの考は繼子根性ともいふべきものである。何故か、聖靈によりて始められたことは吾等自身に價值があるによつて然るのではなく、律法の下にある吾等罪人を贖ひ出し給ふキリストをうけ入れる事によるのであるからである。

勿論この態度をもつて實際生活に於ては此の神の恩恵を現はすことが必要であるはいふま

でもない。即ち神の祝福下にあるものとして、福音に聽き福音を宣べ、これによつて隣人を憐み、同情し、愛さなければならぬのである。

「アバ父よと叫ばしむ」(六節)

ロマ書第八章二六節には「御靈も吾等の弱きを助け給ふ。吾等は如何に祈るべきかを知らざれども、御靈みづから言ひ難き歎きをもて執成し給ふ」とある。是は全く同一の事をいふのである。祈るべき所を知らない悲惨な状態にある吾等の心に御靈は入り來つて、「アバ、父よ」と呼ばしめるといふのである。「祈る所を知らず」。我が信仰生活の沈滞不信の状態。かくの如きものに對してつゆ恩恵のあるべしとも思はれない。勿論恩恵を乞ひ求むべき何等の資格は持合はせない。唯神の審を待つといふよりも今ぞ神に捨てられてあるにあらずや、詛はれてゐるのではないかと思ふより外なき状態の時——これぞ誠に祈るすべなき現實の姿である。此の時御靈は云ひ難き歎きをもつて「アバ、父よ」と叫ばしむるのである。即ち罪と律法の攻撃の眞唯中であつて、惡魔の包圍攻撃の中に手も足も出ない時に聖靈は決して吾等を捨てず、却つて其の弱きを扶けて「アバ、父よ」と叫ばしむるのである。その呻は必ず

や神にまでとどき、サタンの陰惨なる黒雲を破つて福音の光は直接に吾等を光被するのである。

唯然し吾等は實に不信の者であるが故にその御靈の呻を確と聽き得ないのであらう。かゝる時は人の心を極め給ふものは御靈の思（キリスト）を知り給ふが故に完全に吾等を父に執成してくれるといふのである。もしこの事を吾等が信じないならば「主の能力は弱き中に執らせらるゝ」といふ事實を否定しなければならぬ。然るに主の能力は實に弱き中にこそ完らされるのである。聖靈は何等の誘惑も感じない様な聖きものに來ると聖書の何處にもいつてゐない。

嗚呼實に偉大なる叫び呻である「アバ、父よ」これぞ實に主を信するものに對する御靈の扶から來る眞實の呻である。この神の言の深き意味を知らば基督者にとつては最早如何なる偉大な悲惨苦痛も驚くに足らないのであることを確く信じなければならぬ。「神を信するもの即ち御旨によりて召されたるものゝためには凡ての事相働きて益となるを我等は知る」とパウロの言つたのはこの事である。

更に一面「アバ、父よ」と呼ばしむとは、「祈ることが出来る」基督者の特權をいつてゐる。子とされた、そして御靈を與へられた、といふこの二つの事は互に相關するものである。此處に基督教には他の宗教では見られない「祈」の態度がある。口に出して、言葉に出して祈り得るのは人格的の父なる神であるからである。そしてその呼びかけこそ神に似せて造られた人間の魂の叫びでなくてはならない。この魂の叫びこそ御靈の導によつてのみなされるのである。

第十三回講壇

第四章 八然れど汝等神を知らざりし時は、その實神にあらざる神々に事へたり。九今は神を知り、寧ろ知られたるに、何ぞ復かの弱くして賤しき小學に還りて、再びその僕たらんと爲るか。一〇汝等は日と月と季節と年とを守る。一一我は汝らの爲に働きたるの或は無益にならんことを恐る。

「汝等神を知らざりし時は神にあらざる神々に仕へ……」

偶像崇拜である。パウロにとつては、金銀銅木彫等の偶像のみを偶像といふのではなく、律法主義も偶像崇拜である。つまり人間中心、人間自身を偶像として崇めることである。

如何に敬虔に見え、宗教的であり、忠實なる神の僕の様に見えても、ありのままのイエス・キリスト即ち十字架につけられし主なる主を見、それをありのままに受けたいものは悉く偶像崇拜であるといふのである。牧師であれ、平信徒であれ、教師であれ、法王黨であれ誰であらうと主イエスをありのままに認めないならば悉く神を知らないもの、即ち偶像崇拜の罪に問はれるのである。

神はイエス・キリストのみによつて知られる。イエスによつて自からを顯はし給ふ神は、決してユダヤの僞兄弟の提唱する様な残酷な審主ではなく、憐の君、救主である。律法と罪とか、吾等を救ひ出す愛なる神その者の姿である。(ロマ書八・三二―三四) 然るに彼等はこれのイエスを見ないで、此の事を爲せば神は私を義とし、これを爲さなければ怒り給ふと考へてゐる。そしてキリストそのものを見失つて偶像崇拜に歸るのである。然るに眞の神は聖書

を通して語り給ふ。

「余は人間の義なる行爲も、その智慧も、宗教も喜ばない。唯イエス・キリストによつてのみあがめられんことを欲す。故に、キリストをありのままに認めることが即ち余を認める事であり、余を喜ばすことである。かゝる人達に對してのみ余は神であり父である」と。イエスに於てのみ神を見、神を知るといふけれども、聖書の示すありのままの主イエスを見るでなければならぬ。如何に主を救主と口に唱へても(實際教會の誰もがかくいふが)救の第一原因が人間の善行にあるかの如く考へ、かつ説くのはキリストを無用視し、侮辱して、自己崇拜の冒瀆罪を犯してゐる己惚患者である。彼等は神は吾等の人間的善行を喜び給ふと信じ、かつ彼等自から隣人を己の如く愛し得、又誠心誠意神を愛することが出来るとの迷妄を有つものであつて、それはキリストを口にしつゝ實は無用視するものである。神に仕ふるのではなく己の腹を神として仕ふるのである。これが最大の偶像崇拜である。

然し前にも述べた様にパウロは素りに律法を卑下し否定するのではない。律法がその分限を守つてゐる以上善であり聖である。然し律法が人の良心を支配する時その分を超ゆるもの

としてこれを悪魔視して極力排撃するのである。然らば律法の分限とは何ぞ。これは前に既に述べた。

パウロにとつてはモーセの律法のみでなく人間の道徳をいふのである。そして獨り金銀等にて製作された形像をのみ偶像といふのでなく、道德主義に立つ事を偶像崇拜といふのである。キリスト・イエスを抜きにしたあらゆる人間的な事、それが如何に立派に見えても偶像崇拜とするのである。彼はガラテヤ人がこのあはれむべき偶像崇拜から神を知り、神に仕へる様になつたその喜びから離れて再び偶像崇拜に歸つたことを歎くのである。

「今は神を知り、寧ろ神に知られたるに」(九節)

神の存在といふことを概念的に考へることも或は廣い意味に於ては神を知るともいへよう。一般人の神概念である。然し神が吾等人間に對して如何なる方であるか、人間に對する神の御聖愛はどうであるか、といふ様な處まで究めるでなければ、眞に神を知つたとは言へないのである。これが爲には形像に現れた神の姿をキリストに於て見る(否、神の聖愛をキリストに於て見る)でなければ神を知つたとはいへない。故にキリスト以前のユダヤ人の敬虔は

神を知つたとは言ひ得ないのである。少くともそれは人間の想像した神であつて神の眞の姿ではない。「未だ神を見しものなし、唯父の懷裡にいます獨子の神のみ之を顯はし給へり」

(ヨハネ傳一・一八)

「寧ろ神に知られたるに……」

實に面白くもいひしものかな。神を知り神を探らんとする人間のあらゆる努力は無益である。哲學的思索の神探究、或は敬虔なる宗教的見神、或は儀式、或は善行、あらゆる人間の智能を搾り、努力を拂つて、神だ、神だ、といつた處で、それは人間自身の主觀から生れた影像に過ぎない。神は探つて得られず、索めて知ることが出来ない啓示の神である。人間の努力によつて知るでなく、寧ろ人間自身の無價値なること、その邪惡の姿自からに眼醒めて、主イエスを知つた時に神を知るのである。即ち此の主イエスによつて自からを顯はし給ふ神を知つた、これ「神に知られた」のである。

「何ぞ復かの弱くして卑しき小學に還りて」

何で復び昔の偶像崇拜に歸るのであるかと。キリストによつて神に知られ、神に愛せられた

のを直ちに偶像崇拜に歸つて、日と月と年と季を守る様な事をするのか、と。是等の傳統的行事儀式は、パウロにとつてはあつても無くても大したことでは無。然しそれ等のことが(律法)救になくならぬ條件であるかの様に思ふその頑愚を悲しむのである。

十一節では、かく速かに離れ去り、遂には全く離れ去るべきを慨して、今の中に立ち歸らねばと歎いてゐる。昔にガラテヤ人のみでなく、吾等も亦福音から離れ去る多くの基督者を見るのである。その理由は何であらうか。

第一、福音のありがたさ、即ち基督の有難さを知らないからである。眞に主を知ることが如何に人生高貴なることであるかを知らないからである。従つてこの信仰(純福音的)を護り育て保つことに熱心を缺くからである。

第二、何故に福音の主イエスのありがたく貴いことを知らないのか。戦がないからである。罪との戦である。而して罪との戦といへば必ずしも打ち勝つことのみを意味しない。むしろその反對であつて、吾等にとつては敗北が常である。而して罪に對する自からの無力故に、イエスに於て自からを顯はし給ふ神を知ることが出来る。實はこれ以外に神を知る途はない。

これ即ちパウロの「今は神を知り、寧ろ神に知られたるに」といふ所以である。(ヨハネ傳一・一四、一・一八参照)

(一三、一四節)「肉體の弱さ」(コリント後書十二章参照)

(一九節)「キリストの形なるまで」は眞の福音に立歸つて、最早如何なる僞兄弟にも詆かされぬまでになるためには。

(二〇節)「手紙ではいひ盡せない。直接相會うて」といふのである。

第十四回講壇

第五章 一キリストは自由を得させんために我らを釋き放ちたまへり。然れば堅く立ちて再び奴隸の軛に繋がるな。

蓋し第五章の主題である。(テサロニケ後書二・一五参照) 吾等の裡には主の與へ給うた此の自由を極端に憎んで律法の軛に引き戻して吾等を奴隸とせんとする強力な私語あることを吾

等は知らねばならぬ。この私語は恰も吾等の良心の私語の様に聞えるが然らず。主の與へ給うた自由を奪はんとするサタンの私語である。此のサタンは刻々機を窺つてその攻撃の手をゆるめない。故にパウロはいふ、堅くこの自由^に立ちて再び奴隷の轡に繋がるなど。「堅く立つ」……自力で立つのではない。主を信する信仰によつてである。ペテロも此の事をいつてゐる。「慎しみて眼を覺しをれ、汝等の仇なる悪魔、ほゆる獅子のごとく歴廻りて吞むべきものを尋ぬ。汝等信仰を堅うして彼を禦げ」と。(ペテロ前書五・八一―九)如何なる自由であるか。

主が己が身をかゝる罪人なる吾等のために與へ給ふことによつて附與されし自由である。政治、或は組織、制度、或は權力によつて與へられる此の世の自由ではない。勿論本能で肉肉的欲求のままに行動することではない。政治がどうあらうと制度がどうあらうと、全體主義がどうあらうと民主主義がどうあらうと、それによつては微動だもしない魂の自由である。神が與へ給ふ自由である。半身不隨の罪人に與へ給ふ自由である。神の怒からの自由、律法の詛からの自由である。(ヨハネ傳八・三二―三六)「眞理は汝等に自由を得さすべし」

眞理即ちイエスの與へ給ふ自由である。この自由こそ昔に詛から解放する自由である許りでなく、遂に律法をも完うする處の自由である。實に驚くべき自由だ。律法によつて拘束されなければ社會秩序も始末に終へないであらう。吾等をその律法の拘束から解くのみでなく、その律法の命ずる處を自由なる心によつて完うする自由である。

然し誘惑の中にあつて此の自由の眞價を知り感ずることは、實際問題としてはさう易い事ではないのである。故にこの自由に立つためには、先づこの自由は自力で勝ち得なければならぬと考へさせるサタンを排撃して、唯主の寶血によつて買はれるものだといふことを常に銘記してゐることが必要である。「子もし汝等に自由を得させば汝等實に自由とならん」(ヨハネ傳八・三六)此の自由に堅く立ちて再び奴隷の轡につながらぬ、とペテロもいふ。「弟子たちの頸に我等の先祖も吾等も負ひ能はざりし轡をかけんとするか。然らず、吾等の救はるゝも彼等と均しく主イエスの恩恵によることを我等は信ず。」(使徒行傳一五・一〇―一一)然るに偽兄弟たちはいふ。「汝等若し自由を得んと欲せば割禮を受けよ、律法を行へ」と。恩恵の自由を忘れて、律法の奴隷となつて自から自由だといふ愚かさよ。主を信する信

仰の外に何か自分自身の行爲が必要なるかの如く考へる事は既にサタンの觸手に捕へられたのである。此の自由を吾等自身の義や小善で勝ち得るものであるならばキリストは一體何のために來り、何のために十字架にかゝり給うたのであらうか。かゝる頑な傲慢な考はそれ自身キリストを否定してゐる考へである。

ルーテルはいふ。「余が自身に期待したり、或は自分の罪に失望するならば自から主の恩寵を抹殺する。故にサタンが若し吾が眼前に餘の罪を並べ立てたり、或は少しばかりの私の善行を數へ擧げてそんなことに余は毛頭關係しない。又私達の良心にイエスが怒れる審判の様に見えることがあつても、それは決して主でなくサタンであり怪物であることをはつきりと認識する事が必要である」と。(マタイ傳一一・二八一、九・一三、ヨハネ傳一六・三三、ルカ傳一九・一〇等参照)

四 律法によりて義とせられんと思ふ汝等は、キリストより離れたリ、恩恵より墮ちたリ。

吳越同舟、一つのハートに此の自由と律法の拘束と共同生活は不可能である。律法か、否

か、キリストか、否か。故に律法によつて義とされると思ふ者は基督者なりと自分で思つてゐても最早基督者ではないのであつて、恩恵の外に投げ出されたものである。それこそ見れども見えざる盲人であり、聴けども聞えざる啞者である。「見ゆといふ汝等の罪は残り」(ヨハネ傳)である。

五 我らは御靈により、信仰によつて希望をいただき、義とせらるゝことを待てるなり。

信仰と希望、一つのものの両面である。信仰によつて新生を始め、希望によつて信仰を繼續する。カルヴィンはいふ、「神は信者にその全生涯を通じて走るべき悔改の行程を定め給ふ」と。悔改とは己の義に失望して主の恩恵にのみ信賴する新生經驗をいふのである。自から悔改めて改造するといふことではない。

然し神は吾等に新人としての實質も、完全なる恩寵下の服従も、罪からの清潔解放も無造作には與へ給はないであらう。若し吾等が念願するまゝに與へ給ふならばその結果はどうであらうか。それこそ却つて膨れ上がつて主を忘れ、これを必要とせず、恩寵から墮ちるであらう。神は吾等の賜を神の眞實なる約束として常に吾等の前方に掲げて前進の走りを繼續せし

め給ふのである。「吾等は希望によりて救はれたり。眼に見ゆる希望は希望にあらず、人其の見
る處を如何でなほ望まんや」(ロマ書八章)といつてゐる。これはパウロの感謝であり、希望で
あり、同時に祈りであり、呻である。神はこれ等の賜を戦うてとらしめ給はんとするのであ
る。信仰と不信の戦、福音と律法との戦、新人と舊人との戦を繼續することによつて。基
督者はこの希望に生きるものである故に、新人對舊人の戦が基督者の生活である。而してこ
れは最早律法下の戦ではない。

六キリスト・イエスにありては割禮を受くるも割禮を受けぬも益なく、ただ愛に由り
てはたらく信仰のみ益あり。

パリサイの義の無益有害に對して愛によりて働く信仰を提唱する。即ち「信仰によりて主
より與へらるゝ愛」これが基督者生活の凡てである。信仰者は決して怠者ではない。主イエ
ス・キリストを信する信仰は信する者をして恩寵感激の生涯に追ひ込む。即ち聖靈の命令法
に轉化してキリストの與へし自由の上に立てる愛による信仰生活をゆるし給ふのである。

第十五回 講壇

第五章 一六我いふ御靈によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。一七肉の望む
ところは御靈にさからひ、御靈の望むところは肉にさからひて互に相戻ればなり。こ
れ汝らの欲する所をなし得ざらしめん爲なり。一八汝ら若し御靈に導かれなば、律法
の下にあらじ。一九それ肉の行爲はあらはなり。即ち淫行・汚穢・好色・二〇偶像崇拜・
呪術・怨恨・紛争・嫉妬・憤恚・徒黨・分離・異端・二一猜忌・醉酒・宴樂などの如し。我す
に警めたるごとく、今また警む。斯ることを行ふ者は神の國を嗣ぐことなし。二三然
れど御靈の果は愛・喜悅・平和・寛容・仁慈・善良・忠信・二四柔和・節制なり。斯るものを
禁ずる律法はあらず。二四キリスト・イエスに屬する者は肉とともに其の情と慾とを
十字架につけたり。二五もし我ら御靈によりて生きなば、御靈に山りて歩むべし。
二六互に挑み、互に妬みて、虚しき譽を求むることを爲な。

主題 「御靈によりて歩め、さらば肉の慾をとげざるべし」

信仰によりて生きよといふのである。信仰から離れた行を奨励してゐるのではない。信仰なくしては到底人間は肉の生より外はないといふのである。肉の慾といふことは單に肉の享樂といふ事を指して言つてゐるのではない。寧ろ信仰なくしては、即ち御靈によらずして如何に善事に勉強するともそれは律法下の生活であつて、たとへ如何程高く評價して見てもあらはなる肉の生活以上には出ないといふのである。

「汝等もし御靈に導かれなば律法の下にあらじ……」

律法下にあるならば淫行・汚穢・偶像崇拜・呪術・怨恨・紛争・嫉妬・憤恚・徒黨・分離・異端云々。即ち小は一家の事より團體の生活、政治經濟の様相を一瞥したならば思半ばに過ぐるであらう。「かゝる事を行ふ者は神の國を嗣ぐことなし」……これを行為奨励の言と考へて行を先に見るならば大なる誤である。蓋し律法下にある中はかくあるのが當然である。即ち信仰により御靈によつて歩まない結果である。「靈によつて肉と戦へ」といふのである。單に行爲を説いてゐるのではない。「信仰により御靈によりて歩む」とは御靈によつて己が肉と戦へ、律法下の自分を排除せよ、然らば愛・喜悅・平和・寛容……等であつて（イザヤ書一一・六一

九）。「おほかみは小羊と共にやどり、豹は山羊とともに伏し、云々……」のそれである。基督者の生活は御靈と肉との戦の生活である。パウロは此の事を提唱してゐるのである。これを忘れて、「行を説き、心を清潔にせよ」と説くと解するならば大過誤に陥り、遂には絶望の餘り信仰喪失に至るであらう。ロマ書第八章三節には「肉によりて弱くなれる律法の成し能はぬ處を神（キリスト）はなし給へり」とある。かゝるが故に現状のみに屈托して、信仰の働を忘れて己の善美ならざる事のみを思ひ煩つて律法の行爲を考へてゐる勿れ、宜しく御靈（キリスト）をもつて肉の律法と戦へといふのである。基督者と雖も生ける間は肉に生き罪をもつてゐる。それ故に如何に努力するとも律法を完成することは出来ない。然しそれ故に御靈（信仰）によつて歩まなければならない。肉の慾は我等の中に生きてゐる、決して消失してはゐない。時々飛び出して來て信仰に戦を挑む。そして肉のあらはなる振舞、即ち偶像崇拜・怨恨・紛争・嫉妬・徒黨……に虜にせんとするのである。故に御靈によりて、肉と戦へと。管にそれを制壓し打勝つのみでなく「御靈によりて互に愛せよ、互に望を負へ」といふ。パウロは肉を完全に制壓し殺してしまへといはないのである。御靈によつて肉と戦つて肉をし

てその暴威のまゝに振舞はしむる勿れといふのである。ロマ書でパウロは言つてゐる。「我は肉なるものにて罪の下に賣られたり」と。彼自からの實驗告白である。「御靈によりて歩め」之は實に正しく解釋するを要する言である。若し誤り解して律法主義に這入り込む隙をおくならば、遂に失望の極信仰を喪失するに到るであらう。勿論基督者になつたからとて罪はどこまでも罪で、その罪たる事に於いて信仰前も信仰後もかはりはしない。然しキリストを着たる者は「汝の罪赦されたり」の恩寵下にある。キリストを着てゐない即ち人間義をたてんとする者は、常に詛の下にある許りでなく、その善行も亦罪であるといふのである。聖者といふものは石の様な無情な者でなく、又神の様な完全なものでもない。キリスト・イエスを信する信仰を外にして世の人と何等變つてゐないのである。故に自分の罪より潔まらざるを憂ひ悲しむはよいが、然しそれ故に律法下の者として自から考へることは絶対にいけない。現状のみを見て神の恩寵を輕視することが最大なる罪であつてその結果や知るべきである。即ち信仰喪失である。

二五 もし我ら御靈に由りて生きなば、御靈に由りて歩むべし。二六 互に挑み、互に妬

みて、虚しき譽を求むることを爲な。

再びくりかへす。結局、肉とは一言にして言へば人間の誇の誇の誇である。虚榮心だ。この虚榮心人間的誇示から解放されなくてはならない。それがために御靈を要するのである。即ち信仰が必要だ。此處に眞の自由がある。一體キリストの徒には執着がない。屈托がない、恬淡である。白紙だ。御旨のまいにといふのが基督者の窮極の祈りである。捨身といふことを世間でいふけれども、眞の捨身は人間力の頑張りでは不可能である。身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もあれ、眞の捨身はキリストに罪のこのまゝをまかせ切つた信仰態度をいふのである。御靈による時、「即ち汝の罪赦されたり」との神の愛憐の御聲を聴く時、己の虚榮心—人間的のプライドは消えて恬淡白紙の境地に至り得るであらう。

第十六回 講壇

第六章 一兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御靈に感じたる者、柔和なる心

をもて之を正すべし、且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘はるゝことあらん。二
なんぢら互に重を負へ、而してキリストの律法を全うせよ。三人もしあることなくし
て自ら有りとせば、是みづから欺くなり。四各自おのが行爲を驗し見よ。さらば誇る
ところは、他にあらで、ただ己にあらん。五各自おのが荷を負ふべければなり。

六御言を教へらるゝ人は教ふる人と凡ての善き物を共にせよ。七自から欺くな、神は
悔るべきものにあらざ、人の播く所は、その刈る所とならん。八己が肉のために播く者
は肉によりて滅亡を刈りとり、御靈のために播くものは御靈によりて永遠の生命を刈
りとらん。九われら善をなすに倦まざれ、もし携まらずば、時いたりて刈り取るべし。

一〇この故に機を随ひて、凡ての人、殊に信仰の家族に善を行へ。

前章に於てパウロは「愛をもつて互に事へよ」「己の如く汝の隣を愛せよ」と基督者とし
ての根本の生活態度を提出し、第六章に到つて、基督者として特別に留意すべき生活態度を
説く。

一、人の罪過失に對する態度（一—五節）を示して互に重を負へと諭し、

二、牧者の物質的生活を援助するに惜む勿れと戒め（六—八節）

三、同様に、凡ての人、特に信仰の家族に對する態度を説いてゐる。

蓋し基督者の生活態度を具體的に示したものと云へよう。同僚の過失罪惡に對しては「御
靈に感じたる者柔和なる心をもて之を正すべし」といふ。小人は常に他人の惡所缺點をのみ
見、これを指摘することを好むに反し、大人は常に長所をのみ見て惡を見るにうとい。而し
て社會は小人で充滿してゐるのであらうか、己を責むるに緩であつて人を責むるや嚴である
ものばかりである。己を責むる嚴であつて人を責むるに寛なるものは殆んど見當らない感
がないでもない。吾等自身實にその例に洩れないのである。實に吾等は小人の部類に屬する
ものである。然し吾等は御靈に充たさるゝことによつて大人たることが出来るのである。人
を去り獨居反省、唯神と主とのみ對座して祈らんかな。自からに毛頭他人や同僚を非難する
資格なき者であることを痛感せん。そのみでなく、七度を七十倍せよと宣ひし愛憐の主に
よつて赦さるべからざる身を赦されて、今立つ處の恩惠の座に感謝するであらう。これぞ人
生最も偉大な者となつた時である。聖靈に充たされた状態は即ちこれである。此時何ぞ同僚

を非難し審くの心事あらんやである。かく神の前に各が自からを省みるならば、決してサタンに誘はれて、自から有ることなくして、有りとする自欺的態度をたもつてはならないであらう。吾が中に巢喰うてゐる冷かなバリサイ根性はあとかたもなくなるであらう。

「柔和なる心」とは非難する様な心毛頭なく、寧ろ自からをその人の立場にあつたらばと同情の心をもつて、といふ意味である。

「汝等互に重を負へ、然してキリストの律法を全うせよ」(二節)

吾に人の缺點悪所を指摘したり非難しないのみでなく互に重を負うて主の誠命を全うせよといふのである。互に重を負ふとは單に、互の幸福を祈り、或は悲しみをわかち喜びを共にするといふ様な一般的抽象的な事ばかりでなく、もつと切實な問題を意味する様にはれる。即ち自分に加へられた苦痛・非難・中傷・侮辱・忘恩・或は冷淡・薄情かくの如き罪惡に對して七度ゆるすのを七十倍せよと宣し給ひし主の心を心として他を赦すことを意味してゐるのではないであらうか。これぞ誠に前述の様な御靈に充たされてのみ初めて出来ることである。御靈に充たされる時は吾に自分に犯せし最大の罪の記憶が消え去るばかりでなく更に友愛の情

をすらすらしくするのである。かくありてそ、初めて「己の如くその隣を愛せよ」の主の誠命も可能となるであらう。

四各自おのが行爲を驗し見よ、さらば誇る所は他にあらでただ己にあらん。

前半は「神の前に己の行動の動機を省察して見よ」といふ意味である。然らば誇るべき所は自分にあるのであるといふ。

汝等福音のために働くものも顧みて、人の賞讃を得んとする様な不純な心であるならば、たとへ人に賞讃されても自分に何の誇るべきものがあらうか。然し若し神のため、福音のために純粹な心を維持して働かば此の世の人々の非難や賞讃は何等意とするに足らぬであらう。即ち眞に誇るべきものは他にあるでなく自からにあるのである、と。更に一步を進めてパウロはいふ「各自己が荷を負ふべければなり」と人の賞讃や此の世の榮譽等は如何に山と積んで見たところで、死に直面し人生の臨終に於て、神の審判の座につかんとする時、それ等のものは何の扶になるか、彼の最後の重荷を世も人も毛程も分擔してはくれない。彼の生前の榮譽、富、人の賞讃は毫末も彼の苦痛と重荷を輕減してくれない。實に人は各自おのが荷を

負はなければならぬ。されば吾等は主の心を心として互に重を負うて主の誠命を完うせんことを祈り求むる日々を送らねばならぬ。この生活態度のみよく神の審判の前に立ち得る態度である、といふのであらう。

六 御言を教へらるゝ人は教ふる人と凡ての善き物を共にせよ。七 自から欺くな、神は侮るべき者にあらず、人の播く所は、その刈る所とならん。八 己が肉のために播く者は肉によりて滅亡を刈りとり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈りとらん。

牧者の物質的生活を扶けよとの事である。(コリント前書九・一一参照)「もし我等靈の物を汝等に蒔きしならば汝等の肉の物を刈り取るは過分ならんや」と。かゝることはあまり八ヶ間敷くいふべき事でない様である。然るにパウロはこの事を所々で執拗にいふのである。福音宣傳といふ靈的の事業が、職業化することを恐れての故であるか。職業根性をもつては福音の使者としての使命は完うされるものではない。然るにサタンは貧乏といふ物質的迫害をもつて福音の宣傳を妨げ様とするのである。如何にもマンモンと神の國とは同居出来な

い。然ればとて、人間は弱くあり且つ物質を要する存在である。福音宣傳者、靈の仕事をする教會の牧師は貧乏と同居しなければならぬときめつけるのは、主にあるものの態度ではない。勿論牧者は廣大なる寺領を有ち、或はロマ法王黨の様な財力で膨れ上がることもあるべきでなく、又信者の金錢財寶を集めて私すべきでは斷じてないが、だからといつて靈的の仕事をするものであるから金錢や物質の事はおくびにも出してはならぬ、お前は貧乏を小言いつてはいけないときめつけるのは基督者の態度として恥づべきことであるが故にパウロは戒めてゐる。

實に吾等は不思議にも、世の中の義理とか贈り物といふことに惜しみなく出す割合に教會のことなどに對しては出さないのである。(波多野貞夫中將がこの様なことを言はれて大笑をしたことがある)パウロは實に福音の前途に對し先見の明察を以て此の戒を残し、同時に信者の信仰の成長のためにも此のすゝめをなしたものであらう。

七節八節は矢張り同様のことをいつたので六節の註釋と見るべきである。「己が肉のために播く」とは六節の精神に適はざるものでその信仰の上進は覺束なく「御霊のために播く」

とは福音の事業には惜しまず出す事を意味し、従つて其の靈的收穫は大なるものがあらう、九節から十節。特殊から一般に移つてゐる。「凡ての人に對して」互に重きを負ひ己の如くその隣を愛する愛の擴大延長である。「特に信仰の家族に對して善を行へ」と。「善を爲すに倦まざれ」一度や二度の善は何人もなすことあるべし。機會のある毎にこころから常に善を行へ。而して「倦まざれ」冷淡や忘恩を以て報いられることが度々あつても決して善をなすに倦まざれ、失望せや忍びて、……これ即ち「互に重きを負ふことである」……かくしてこそ初めて、「時いたりて刈り取るべし」で靈的收穫は甚大なるべし。此處にいふ「善」も愛の具體化である。愛は必ず具體的に表現されるに到らなければ意味をなさない。基督者は或は此の點に關して甚だ無頓着過ぎるかも知れない。パウロの炯眼や驚くべし。

第十七回講壇

第六章 一一 視よ、われ手づから如何に大なる文字にて汝らに書き贈るかを。一二 凡

そ肉において美しき外觀をなさんと欲する者は、汝等に割禮を強ふ。これ唯キリストの十字架の故によりて責められざらん爲のみ。一三 そは割禮をうくる者すら自ら律法を守らず。而も汝らに割禮を受けしめんと欲するは、汝らの肉につきて誇らんが爲なり。一四 然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。之によりて世は我に對して十字架につけられたり、我が世に對するも亦然り。一五 それ割禮を受くるも受けぬも、共に數ふるに足らず、ただ貴きは新に造らるゝ事なり。一六 此の法に循ひて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、平安と憐憫とあれ。一七 今よりのち誰も我を煩はすな、我はイエスの印を身に佩びたるなり。

本書翰の結語である。その冒頭出發に照應する結語である。キリストを信ずると稱して尙、舊殼を脱せず、頑迷固陋なる律法主義の僞兄弟たちを粉碎せずんばやまざるの慨をもつて結んでゐる。品のよい罵聲ともいへる。

十一節「視よわれ手づから如何に大なる文字にて汝等に書き贈るかを」パウロは、他の多くの書翰は筆記者をして認めさせて自から筆を執ることは少なかつたと

見える。然しガラテヤ書は純福音の防壁としてかゝれたものである。彼は自から手記したものと見える。而して實にこれぞ大文字である。冒頭より言々句々十字架の福音防衛の巨砲の叫びである。舌端火を飛ばす靈火の言である。

十二、十三節「凡そ肉において美はしき外觀をなさんと欲する者は汝等に割禮を強ふ……云々」彼等偽兄弟たちは自から榮譽を求むるものである。従つてユダヤの民衆に迫害せられざらんために十字架を説かないものである。十字架はユダヤの民衆の躓く處のものである。パウロもかつては躓いた。十字架を説かないものは割禮（律法）主義者である。（第一章八節—十節参照）

「割禮を受けるものすら自から律法を守らず……云々」
律法を守つてゐる様で守つてゐない。行爲と心とは黒と白である。

十四節「然れど吾等には吾等の主イエス・キリストの十字架のほか誇る處あらざれ」
憤怒の情が溢れてゐる。肉に誇るものをして肉に誇らしめよ。吾等は主の十字架の外誇る處あらざれ。唯キリスト・イエスの十字架なるが故に十字架を誇るばかりでなく、同時に主イ

エスのために、自から十字架を負ふことも。敢て辭するものでない。寧ろこれを誇るのである。「我ために、人汝を罵り、また責め……幸なり喜び喜べ、天にて汝等の報は大なり。」（マタイ傳五・一一—一二）人世の誇は主の十字架の誇と肉の誇の二つ。十字架の誇をもたぬものは肉の誇であり己の虚榮である。十字架に誇るためには全く己の誇（肉の誇）を捨てなければならぬ。パウロは己の誇の如何に卑下すべきものであるかを知り得たが故に十字架によつて己の誇を捨てることが出来た。（ピリピ書三・二—八参照）

十四節「之によりて世は我に對して十字架につけられたり云々」
「十字架なき凡ては余は詛ふ」といふのである。神を忘れた文化もその道德も、或は慈善事業も詛ふのである。之等のものは神を恐れ、神の前に立ち、十字架によつてその處を得る事によつて善なる使命を全うこそすれ、十字架によらずしては詛ふべきものである。十字架によらざる律法や律法主義者とは余は絶縁した。舊き余自身はキリストの十字架と共に死滅したと同様に、凡そ律法主義の世は吾とは今後無關係だ。「我が世に對するも亦然り」を附加することによつて、パウロは律法主義と關係しないことを鋭くいひ表はすのである。

十五節 「それ割禮を受くるも受けぬも共に數ふるに足らず、唯貴きは新に造らるゝことなり。」

割禮、そは何ぞや。獨身生活、斷食そは何だ。修道院生活、そは何だ。律法の義、そは何だ。人格、品性、そは何だ。「凡て信仰によらざるものは罪なり」(ロマ書一四・二三)パウロは割禮といふ言葉に託して律法の凡てを含ませて一括して排してゐる。人間の即ち肉の榮の凡ての無益なることを絶叫するのである。唯新らしく創造さるゝ事のみ益ありと。ヨハネ傳第三章には主の言として「人新に生れずば神の國に入ること能はず」といふ言が掲げられてゐる。如何に人間的努力が美しく偉大に見えたとしても、肉の誇よりは一步も出でぬを知らねばならぬ。十字架の前に己の誇を粉碎されて内なる魂の根本的改造これのみ益である。勿論、パウロは律法を如何なる場合にも無視するのではない。律法は律法としての處を得しめ分を守らせて置けばよいのである。然るに、キリスト來りて、律法の用は濟んだ。個人の救についてもその個人の心にキリストが來臨すると同時に律法の用は廢るのである。個人が福音を心から迎へ入れるその瞬間に、律法はその占めてゐた持場を讓つて後退すべきである。

る。然るにキリスト・イエスを信する信仰を口にしつつ、なほ律法に未練を残してゐる事は、キリストの恩恵を徒爾にする事である。而してパウロは常に律法と福音の交替すべきをいふばかりでなく、律法が處を得るには信仰の扶けを要することをもいつてゐる。「然らば我等信仰をもて律法を空しくするか。決して然らず、却つて律法を堅うするなり。」(ロマ書三・三一)と。蓋し、律法だけでは必ず行き過ぎるのである。人間の修養、道德的努力も信仰によつて、調整を保たないならば人間をして傲慢にするより外はない。

十七節、「今より後誰も我を煩はすな、我はイエスの印を身に佩びたるなり。」

「これはイエスの死を身に負ふ」(コリント後書四・一〇)と併せ考ふるべきである。「もう澤山である。眞平御免である。おれに干渉してくれな。おれはキリストの十字架で澤山だ。諸君は諸君で勝手に律法の義にかじりついてゐるがよろしい。私は私で主の十字架に凡てをかけてゐる。ただ願はくは私のことにかゝはつてくれるな。私はイエスの印を身に佩びてゐる。」と。印を身に佩びるといふことは福音のために牢獄に入れられ、鞭打たれ嘲笑された幾多の記憶、歴史をもつてゐると註釋する人達もある様だが、それは餘りに穿ち過ぎた解釋

である。常にイエスの死を身に負ふでよい。ガラテヤ書第二章二十節である。「今我肉體にありて生くるは吾を愛し吾ために己が身を捨て給ひしキリスト・イエスを信する信仰によりて生くるなり」であらう。

結 語

二十回に垂んとして漸くガラテヤ書の講壇を終つてホットする感であつた。足りない處もあつたらうし、廻りくどい處もあらう。獨斷的な處も或はあるであつたらう。然し結局は本書翰の冒頭の「主は我等の父なる神の御意に隨ひ、我等を今の惡しき世より救ひ出さんとて己が身を我等の罪のために與へ給へり」この事を信する信仰のみによつて義とされるといふ本書翰を貫する單純な信仰と思想とを毎回の講壇としたのであつて見れば、くどいと云へばくどい筈でもある。

私が先づ第一にガラテヤ書を講壇に採つたのは聖書について講義するといふ目的をもつて

ではなく、「我等の救はるゝのは唯神の恩恵による」てふ純福音を強調して、我等自からの福音を律法主義の非福音に墮落せしめない爲にと念願したからである。實にパウロによつて此の書翰を投げつけられたものは、獨り昔のガラテヤ人のみでなく、今日の吾等基督者である。我等は誠に福音を喜ぶ。然し我等自身の裡に我等を律法主義に逆戻りせしめようとするものを有つてゐるのである。されば「キリストは自由を得させんために我等を釋き放ち給へり。然れば堅く立ちて再び奴隸の轡に繋がるな」といふパウロの警告を我等への警告として不斷に神の恩恵から墮落しない様に祈らねばならない。「眼を醒ましをれ」とは蓋しこのことである。パウロの書翰も吾等の講壇も他に向つて訴へるのでなく、先づ我等自からへの警告であり、又我等自からの告白であることを要する。是れ此の拙き講壇を同信の友に頒つ所以である。

(昭和十六年六月)

昭和十八年五月十日 印刷
昭和十八年五月廿日 發行
ガラテヤ書講解
非賣品

著者 小原福治

發行者 唐澤正作
東京市世田谷區赤堤町二丁目四五ノ一番地

印刷者 太田三惠子
東京市牛込區早稻田鶴卷町三〇八

印刷所 大庭印刷所
東京市牛込區早稻田鶴卷町一八八
(東東三五六)

終

